秋田県文化財調査報告書第466集
払田柵跡調査事務所年報2010

払田柵跡

―第141次調査概要―

２０１１年３月

秋　田　県　教　育　委　員　会
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

題字　新野直吉　書

払田柵跡調査事務所年報2010

払田柵跡

―第141次調査概要―

２０１１年3月

秋　田　県　教　育　委　員　会

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

序

史跡払田柵跡は、管理団体である大仙市による環境整備も順調に進捗し、遺跡を訪れる方も年々増加していることは喜びに堪えないところであります。

このような中、平成22年度は、第８次５年計画の２年目として長森丘陵部南側の沖積地を対象とした第141次調査を実施しました。また、払田柵跡関連遺跡の調査として、能代市檜山安東氏城館跡（大館跡）において遺跡の内容確認調査も行いました。

第141次調査では、大路地区西側の沖積地を調査し、史跡公園として復元されている旧河川がかつて氾濫した河川敷と、その影響を受けることがなかった微高地との境界を確認することができました。長森丘陵裾野の微高地には火山灰が面的に分布し、この分布が北東側に広がることが想定されました。

また､払田柵跡に関連する集落跡として調査した史跡檜山安東氏城館跡（大館跡）では、平安時代の集落跡と台地中央を横断する土塁・空堀との詳細な関係について情報を得ることができました。

本書は以上のような調査成果とともに史跡調査に関する普及活動事業の成果を収録したものです。活用いただければ幸いと存じます。

最後に、発掘調査並びに本書作成にあたって指導と助言を賜りました、文化庁記念物課、宮城県多賀城跡調査研究所に感謝申し上げますとともに、史跡管理団体である大仙市・大仙市教育委員会、美郷町・美郷町教育委員会の御協力に対し、厚く御礼申し上げます。また、大館跡の調査においては、能代市教育委員会にも多大な御協力を頂きました。感謝申し上げます。

平成23年３月

秋田県教育庁払田柵跡調査事務所

所長　櫻　田　　隆

例　言

1　本年報は、秋田県教育庁払田柵跡調査事務所が平成23年度に実施した調査研究事業である、払田柵跡第141次調査､関連遺跡の調査及び調査成果の普及と関連活動の成果を収録したものである。なお第４章には、関連遺跡の調査として檜山安東氏城館跡（大館跡）の調査成果を収載した。本調査は緊急雇用創出臨時対策基金による秋田県重要遺跡調査事業として実施したものであり、秋田県文化財調査報告書第467集『秋田県重要遺跡調査報告書Ⅱ』として平成23年３月に報告書を刊行予定である。従って本年報ではその概要について紹介する。

2　発掘調査並びに本年報作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長　新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授　岡田茂弘氏、富山大学教授　黒崎直氏、秋田大学学長特別補佐　熊田亮介氏から御指導をいただいた。

3　本年報を作成するにあたり、次の方々より有益な教示をいただいた。記して謝意を表する。
近江俊秀・林正憲（文化庁記念物課埋蔵文化財部門）　伊藤武士（秋田城跡調査事務所）
山崎文幸・熊谷直栄・斉藤浩志・星宮聡仁（大仙市教育委員会）　亀井崇晃・山形博康・高橋広樹（美郷町教育委員会）　信太正樹・島田祐悦（横手市教育委員会）　　以上　順不同・敬称略

4　第３章第３節は、分析委託業者であるパリノ・サーヴェイ株式会社から成果品として納められた報告書を掲載した。

5　調査に係る全ての資料は、秋田県教育委員会が保管している。

6　本年報の作成・編集は、当事務所長の指導のもと、五十嵐一治が行った。

凡　例

1　遺構等の実測図は、世界測地系（測地成果2000）による平面直角座標系第Ｘ座標系を基準に作成した。実測図・地形図中の方位は座標系を示し、磁北はこれよりＮ７°30′00″Ｗ　であり、真北はＮ０°10′38″Ｅである。詳細は『払田柵跡調査事務所年報2005』（2006年３月刊）の第３章第３節２を参照いただきたい。

2　土層断面図等の土色の表記は､小山正忠･竹原秀雄『新版標準土色帖』(19版1997年）に拠ったが、本書の記述にあたり、土質（性）を重視して記載した。表記にあたり基本層序は、ローマ数字（Ⅰ、Ⅱ･･･)、遺構堆積土はアラビア数字（１、２･･･）を使用した。また盛土・整地層をＭ、撹乱層をＫとして略号表記した。

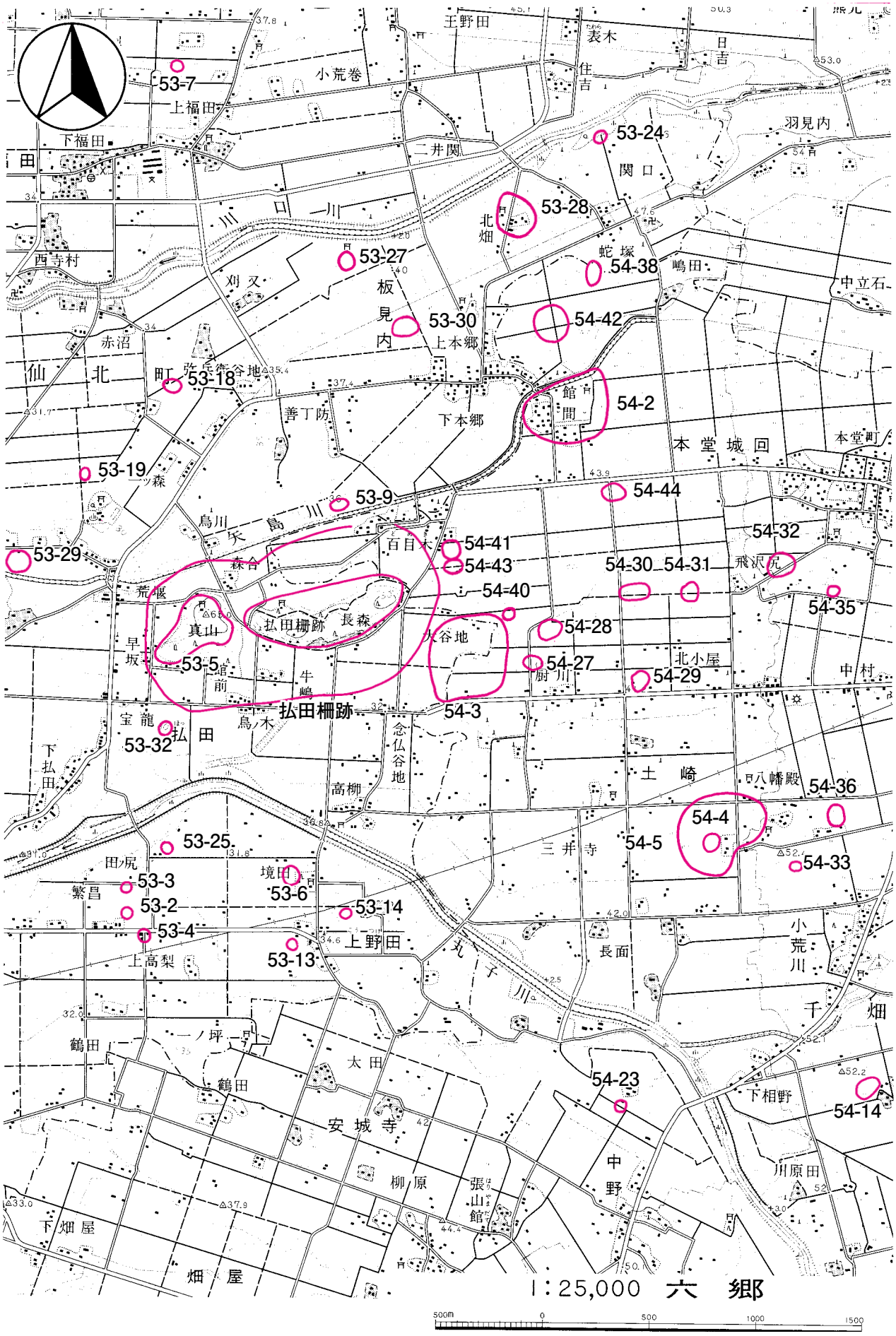
払田柵跡調査事務所年報 2010

目　次

序
例言･凡例
第１章　遺跡の概要……1
第２章　調査研究事業の計画と実績
　第１節　第８次５年計画の概要……4
　第２節　本年度事業の計画と実績……5
第３章　第 141 次調査の概要
　第１節　調査の目的と調査区……7
　第２節　検出遺構と遺物……10
　第３節　自然科学的分析……13
　第４節　小結……20
第４章　檜山安東氏城館跡（大館跡）調査の概要……26
第５章　調査成果の普及と関連活動……36

【挿図目次】

第１図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡……iv
第２図　払田柵跡調査実施位置図……6
第３図　調査区トレンチ詳細図……8
第４図　調査区トレンチ土層図……9
第５図　遺構外出土遺物……12
第６図　第 141 次調査区における花粉化石群集の層位分布……15
第７図　大路地区西側沖積地概念図……21
第８図　大館跡周辺の主な古代遺跡……27
第９図　調査区トレンチ詳細図……30



第１図　払田柵跡周辺の古代～近世の遺跡

第１章　遺跡の概要

払田柵跡は、秋田県大仙市払田・仙北郡美郷町（みさとちょう）本堂城回にある古代城柵官衙遺跡である。遺跡は雄物川の中流域に近く、大仙市大曲地区の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置する。遺跡は、第三紀硬質泥岩からなる真山・長森の小丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川、旧名：荒川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

遺跡は、明治 35・36 年（1902・03）の千屋村（現美郷町）坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治 39 年（1906）頃から開始された高梨村（現大仙市）耕地整理事業の際に土中に埋もれ木のあることが端緒となっている。その後、この埋もれ木について地元の後藤寅之助（宙外）・藤井東一（甫公）らが注目し、氏らによって歴史的遺産と判明された。

昭和５年３月、高梨村が調査を実施したが、その中心となったのは後藤寅之助で、さらに同年 10 月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われ遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年３月 30 日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和 63 年６月 29 日付けで史跡の追加指定がされ現在に至っている。史跡指定面積は 899,380.97㎡である。

昭和 40 年代に入り、史跡指定地域内外の総合整備パイロット事業等の計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することとし、昭和 49 年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した（昭和 61 年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）。さいわい、地元管理団体である仙北町および地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

史跡は長森・真山を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物には５時期（Ⅰ～Ⅴ期）の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は 10 世紀後半である。政庁の調査成果は昭和 60 年に報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』として公刊された。

一方、区画施設である外柵は、真山・長森の二つの丘陵を囲むようにしてあり、東西 1,370 ｍ、南北 780 ｍの長楕円形で、標高 32 ～37 ｍ、総延長 3,600 ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約 878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、長森を取り囲むようにしてあり、東西 765 ｍ、南北 320 ｍの長楕円形で、面積約 163,000㎡、最高地は標高 53 ｍである。外郭線の延長は約 1,760 ｍで石塁（南門脇）、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に４時期にわたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称されていたが、それまでの調査成果を踏まえ、平成７年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は、平成 11 年に報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』として公刊された。

出土品には、須恵器・土師器・瓦質土器・緑釉陶器・灰釉陶器・青磁（越州窯系）・瓦・硯などのほか、紡錘車・坩堝・羽口・支脚などの土製品、石帯・砥石・金床石などの石製品、鉄鏃・鎌・刀子・釘・紡錘車などの鉄（銅）製品・鉄（銅）滓類、斎串・曲物・挽物・鋤・楔・絵馬（２点）などの木製品、漆紙文書（６点）・木簡・墨書土器（朱書もあり）・箆書土器などの文字資料がある。

木簡（刻字のある柵木 12 点を含む）は 103 点確認されており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二

石八斗八升」「嘉祥二年正月十日」などと記された文書・貢進用木簡があり、「別當子弟大伴寧人」「鹿毛牡馬者」「矢田部弓取」「北門」「狄藻」（以上墨書）、「山本」「最上」「最上四」「禰木田」「一三□木二」「全二」「行」（以上刻字）などの文字もある。

墨書・箆書土器は 545 点出土・採集されており、一少隊御前下・大津郷・鷹空上・懺悔・小勝・音丸・北門・北預・厨家・靫大・中大・中万・厨・官・舎・館・磨・宅・新・吉・秋・郡・千・主・長・酒・安・賀・全・成・前・伴・部・左・文・名・上・下・矢・車・工・益・山・就・立・生・平・延・圓・集・大・木・中・仲・犬・方・継・廳・春・又・十・七・没（以上墨書）、「出羽□　郡□男賀凡酒坏」（箆書）などの文字が認められる。

管理団体である大仙市は、昭和 54 年度から保存管理計画による遺構保護整備地区の土地買い上げ事業を進めており、昭和 57 年度からは調査成果に基づいて環境整備事業を実施している。さらに平成３年度から「ふるさと歴史の広場」事業により、外柵南門跡や大路東建物跡、河川跡・橋梁の復元整備、ガイダンス施設（払田柵総合案内所）の設置などを行い、更に平成７年度からは「ふれあいの史跡公園」事業により、政庁東方の官衙建物跡の整備などを実施した。平成 10 ～12 年度には外郭西門跡の門柱及びこれに取り付く材木塀跡の復元整備を、平成 13 年度からは外郭北門から東門周辺の整備事業を開始しており、本年度は外郭北門周辺の盛土整地を実施している。また、外郭北門周辺の低地部には埋没遺材の保護を目的とした水位計の設置を進めており、平成 18 年度より６箇所の埋設が完了し、継続的な水位の観察が続けられている。

なお、平成 21 年度までに実施した過去 35 年間の発掘調査面積は、秋田県埋蔵文化財センター（第 102・128・131・134 次）・大仙市（旧仙北町）、美郷町（旧千畑町）調査分を含めて、延べ 50,218㎡（重複調査分を差し引くと実質 47,251㎡）であり、史跡指定総面積のうちの 5.3％にあたる。

【第１表の註】

1　秋田県教育委員会 1987『秋田県遺跡地図（県南版）』
2　秋田県教育委員会 1981『秋田県の中世城館』秋田県文化財調査報告書第 86 集
3　千畑町 1986「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』
4　秋田県教育委員会 1981『内村遺跡』秋田県文化財調査報告書第 82 集
5　千畑町教育委員会 2004『中屋敷Ⅱ遺跡』千畑町文化財調査報告書第６集
6　千畑町教育委員会 2004『十二遺跡・上飛沢遺跡』千畑町文化財調査報告書第７集
7　秋田県教育委員会 2005『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第 383 集
8　今村義孝校注 1966『奥羽永慶軍記（上）（下）』人物往来社
9　美郷町教育委員会 2005『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町文化財調査報告書第１集
10　山崎文幸 2004「秋田・観音堂遺跡」『木簡研究』第 26 号　木簡学会
11　大仙市教育委員会からの情報提供による。
12　秋田県教育委員会 2005『中屋敷Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第 384 集
13　美郷町教育委員会からの情報提供による。
14　秋田県教育委員会 1996『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第 267 集

15　秋田県教育委員会 2007『秋田県遺跡地図(仙北地区版)』
16　島田祐悦・高橋学 2007「内村遺跡」『横手市史 資料編 考古』
17　美郷町教育委員会 2008『城方小屋遺跡・森崎Ⅱ遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第６集
18　美郷町教育委員会 2007『本堂城跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第５集
19　美郷町教委 2008『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町埋蔵文化財調査報告書第７集
20　山形博康 2009「秋田・本堂城跡」『木簡研究』第 31 号　木簡学会

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備　考	註
212-53-1	払田柵跡	大仙市払田	古代城柵官衙遺跡（９世紀初頭～ 10 世紀後半）集落（縄文)、墓地（中世)、城館（堀田城）	
434-54-1		美郷町本堂城回		
212-53-2	繁昌Ⅰ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
212-53-3	繁昌Ⅱ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-4	上高梨遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-5	堀田城跡	大仙市払田	真山丘陵を利用した中世城館跡	2･8
212-53-6	境田城跡	大仙市払田	中世城館跡：天正 18 年（1590）破却	2
212-53-7	杉ノ下Ⅰ遺跡	大仙市横堀	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-9	鍛冶屋敷遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-13	四十八遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-14	中村遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-18	弥兵谷地遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器）	1
212-53-19	一ツ森遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器系陶器壺）	1
212-53-24	堰口遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（鉄滓）	15
212-53-25	田ノ尻遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212-53-27	観音堂遺跡	大仙市板見内	近世集落跡、掘立柱建物跡、井戸等検出	10
212-53-28	北畑遺跡	大仙市北畑	中世集落・墓地、火葬墓、2005 年発掘調査	11
212-53-29	一ツ森Ⅱ遺跡	大仙市堀見内	遺物包含地（須恵器)、2003 年発見	11
212-53-30	八幡堂遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器、中近世陶器）	11
212-53-32	下川原遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器)、1995 年発見	14
434-54-2	本堂城跡	美郷町本堂城回	本堂氏の居館跡、2004 年～確認調査	18･20
434-54-3	厨川谷地遺跡	美郷町土崎	埋蔵銭出土地（1915 年≪大正４≫出土）	3
			古代祭祀遺跡、2001 年発掘調査	7
434-54-4	中屋敷Ⅰ遺跡	美郷町土崎	寺院跡	1
434-54-5	中屋敷Ⅱ遺跡	美郷町土崎	縄文・古代集落跡、2002・03 年発掘調査	5・12
434-54-14	内村遺跡	美郷町千屋	古代集落跡、1980 年発掘調査、中国産青磁出土	4・16
434-54-23	砂館跡	美郷町中野	城館跡	2
434-54-27	厨川谷地Ⅱ遺跡	美郷町土崎	中世以降？、2000 年発見	9
434-54-28	厨川谷地Ⅲ遺跡	美郷町土崎	古代、2001 年発見	9
434-54-29	下中村遺跡	美郷町土崎	古代、2002 年発見、墨書土器出土	9
434-54-30	飛沢尻遺跡	美郷町土崎	古代、2002 年発見、墨書土器・和鏡出土	9
434-54-31	下飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2002 年発見	9
434-54-32	上飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2003 年発掘調査、掘立柱建物跡検出	6
434-54-33	上館遺跡	美郷町土崎	中近世城館跡か、2002 年発見	13
434-54-35	松ノ木遺跡	美郷町土崎	中世～近世、2003 年の確認調査で柱穴確認	9
434-54-36	八幡殿遺跡	美郷町土崎	古代集落跡か、2003 年確認調査	9
434-54-38	西館遺跡	美郷町本堂城回	縄文・古代、2005 年発見	13
434-54-40	森崎Ⅰ遺跡	美郷町本堂城回	古代、2006 年発見、墨書土器出土	19
434-54-41	城方小屋遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007 年発掘調査、柵列跡、土坑墓	17
434-54-42	北館遺跡	美郷町本堂城回	近世集落跡、2006 年発見	13
434-54-43	森崎Ⅱ遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007 年発掘調査、竪穴住居跡	17
434-54-44	田町遺跡	美郷町本堂城回	古代遺物散布地、2007 年発見	13

地図番号の 212 は大仙市管内、53 は旧仙北町域を示し、434 は美郷町管内、54 は旧千畑町域を示す。

第２章　調査研究事業の計画と実績

第１節　第８次５年計画の概要

秋田県は、史跡払田柵跡の解明にあたるため、昭和 49 年４月に秋田県払田柵跡調査事務所を開設し（昭和 61 年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）、同年から５年で１単位の中期計画を立案して継続的な発掘調査を毎年実施している。

第１～２次５年計画（昭和 49 ～58 年度）では、主に「中枢施設の全面発掘」を行い、政庁域の建物や区画施設（板塀跡）の配置、変遷を明らかにした。第３～５次５年計画（昭和 59 ～平成 10 年度）では、外柵・外郭の区画施設（築地・材木塀跡）や門跡、長森丘陵部東側の官衙域、外郭低地（主に外郭南門～外柵南門跡間の南北大路周辺）の調査を行った。このように第１～５次５年計画による 25 年間の発掘調査では、城柵官衙遺跡の中枢ともいえる政庁域と門跡を含む区画施設の様相把握、及び柵内の一部地区（主に長森丘陵部東側、南北大路周辺）における遺構内容の解明が進められた。

第６次５年計画（平成 11 ～15 年度）は、過去 25 年間の調査成果と派生する課題を踏まえ、その後の調査や環境整備に資することを目的に、主に長森丘陵の各場にどのような施設が存在するのかを把握しようとした。調査は長森丘陵部西側から開始したが、調査にあたり、トレンチ法を採用したことで結果的には、少ない調査面積で多くの情報を得ることができた。第６次５年計画で採用した調査手法は、長森丘陵部における場の使われ方を予測することと、払田柵跡を適切に保存・管理し、活用するためにも有効であることを再確認した。

第７次５年計画（平成 16 ～20 年度）では、「払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査」として、第６次同様の手法を用いて実施した。その中での重点区は、長森丘陵部北側、外柵地区南東部（沖積地）、真山丘陵部であった。また、「払田柵跡関連遺跡の現況調査及び情報収集」という柵外にも視野を広げた計画を掲げ、平成 19 年度には、横手市雄物川町で試掘調査を実施した。

過去 35 年間の実績を踏まえ、払田柵内外の各地区における場の使われ方と詳細な遺構内容を把握し、歴史的意義や特色を明確にすることを目指し、第８次５年計画は以下のように定めた。

（１）払田柵跡の各地区における遺構内容及び場の機能の調査

調査対象地区は、払田柵跡内全域ではあるが、特に外柵地区と真山地区を重点地区として進める。

①外柵地区（沖積地・微高地部）の調査

沖積地・微高地部の調査は、柵内南東部域を除くとほとんど行われていない。水田として作付けが行われている地区であることから制限されることは多いが、「場の機能」解明のため、地権者の同意を得た上でトレンチ調査を実施する。そのなかでも、長森丘陵部南西側裾部、及び柵内北西部と北東部（本堂城回地区）・南部を重点地区とする。本堂城回地区は、ほ場整事業に伴う現状変更対応の調査でもある。また、南部では河川が外柵材木塀と交差する箇所であることから、当時の景観復元のため当該地区の調査も実施したい。

②真山地区の調査

払田跡創建期の内容解明にとって重要な真山地区の調査を実施する。小規模ではあるが遺構内容確認調査を行う。

（２）払田柵跡関連遺跡の試掘調査等

払田柵跡の解明には指定地内の調査に加え、指定地外の同時代関連遺跡の調査が必要である。そのために、関連資料・情報の収集、現地踏査を踏まえた上で試掘調査を実施する。

また、一連の作業・調査を通じて県内各市町村との連携を深め、当事務所が蓄積している史跡発掘調査・研究についての実践的な技術指導、史跡の保存・活用に関する情報の提供等を行う。

第２節　本年度事業の計画と実績

払田柵跡調査事務所が平成 22 年度に実施した事業は、第８次５年計画等に基づき、下記の項目を設定し、実施・活動した。

（１）払田柵跡の発掘調査（２）関連遺跡の調査（３）調査成果の普及と関連活動

本節では（１）についての調査計画及び実績の概要を記し、詳細は第３章に記録する。（２）は第４章、（３）は第５章にそれぞれの概要を収録する。

本年度の発掘調査は、次のような「平成 22 年度払田柵跡調査計画」を立案して調査を実施した。発掘調査事業費は、総経費 400 万円であり、うち国庫補助額 200 万円（50％）、県費 200 万円（50％）である。

第２表　平成 22 年度払田柵跡調査計画表

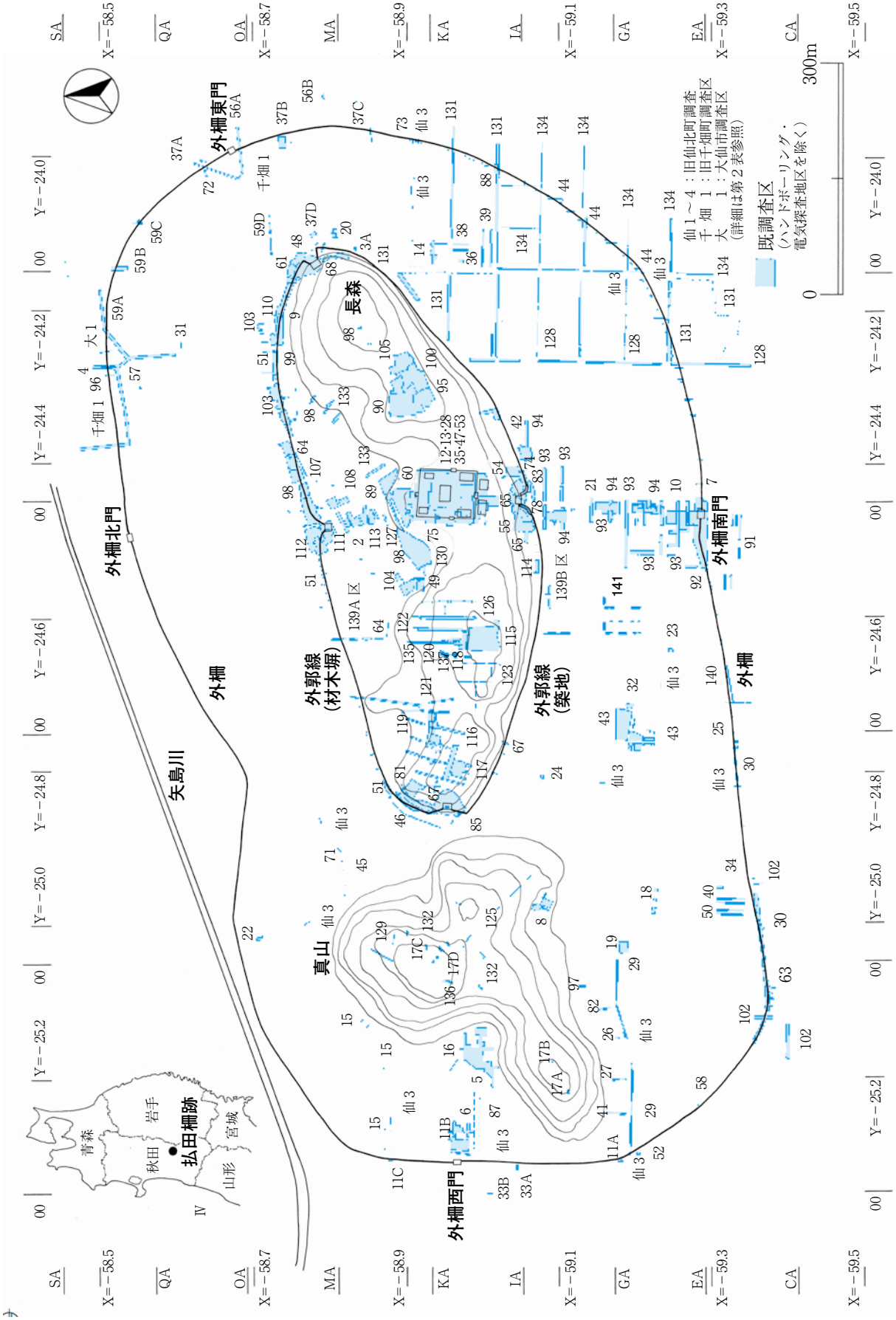
調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間・備考
第 141 次	大路地区 （大仙市払田字仲谷地）	遺構内容確認調査	200㎡	５月 24 日～ ８月 13 日 ※文化庁補助事業
合　計	１　地　区		200㎡	

本年度調査の実績は第３表のとおりである

第３表　平成 22 年度払田柵跡調査実績表

調査次数	調査地区	調査内容	調査面積	調査期間・備考
第 141 次	大路地区 （大仙市払田字仲谷地）	遺構内容確認調査	188㎡	５月 31 日～ ７月 29 日
合　計	１　地　区		188㎡	

第 141 次調査は、長森南側の沖積地に位置し、第 139 次調査Ｂ地区で検出した盛土整地地業および丘陵縁辺の微高地の広がりを把握する調査である。



第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　第 141 次調査の概要

第１節　調査の目的と調査区

本調査は、第８次５年計画で示した「外柵地区（沖積地・微高地部）の調査」として実施した。調査区は大路地区中央西側であり、外柵南門跡の北西約 140 ～200 ｍの沖積地部にあたる。当該地区は、平成８年に実施された電気探査による河川跡の推定位置の調査（第 109 次調査、秋田大学・西谷忠師氏に調査依頼）により河川跡の長森丘陵裾部から河川氾濫原へと変化する箇所とされたところである。このことから、本調査は河川跡右岸の氾濫原の詳細と丘陵裾部に係る遺構の有無、分布状況を探ることを目的として実施することにした。

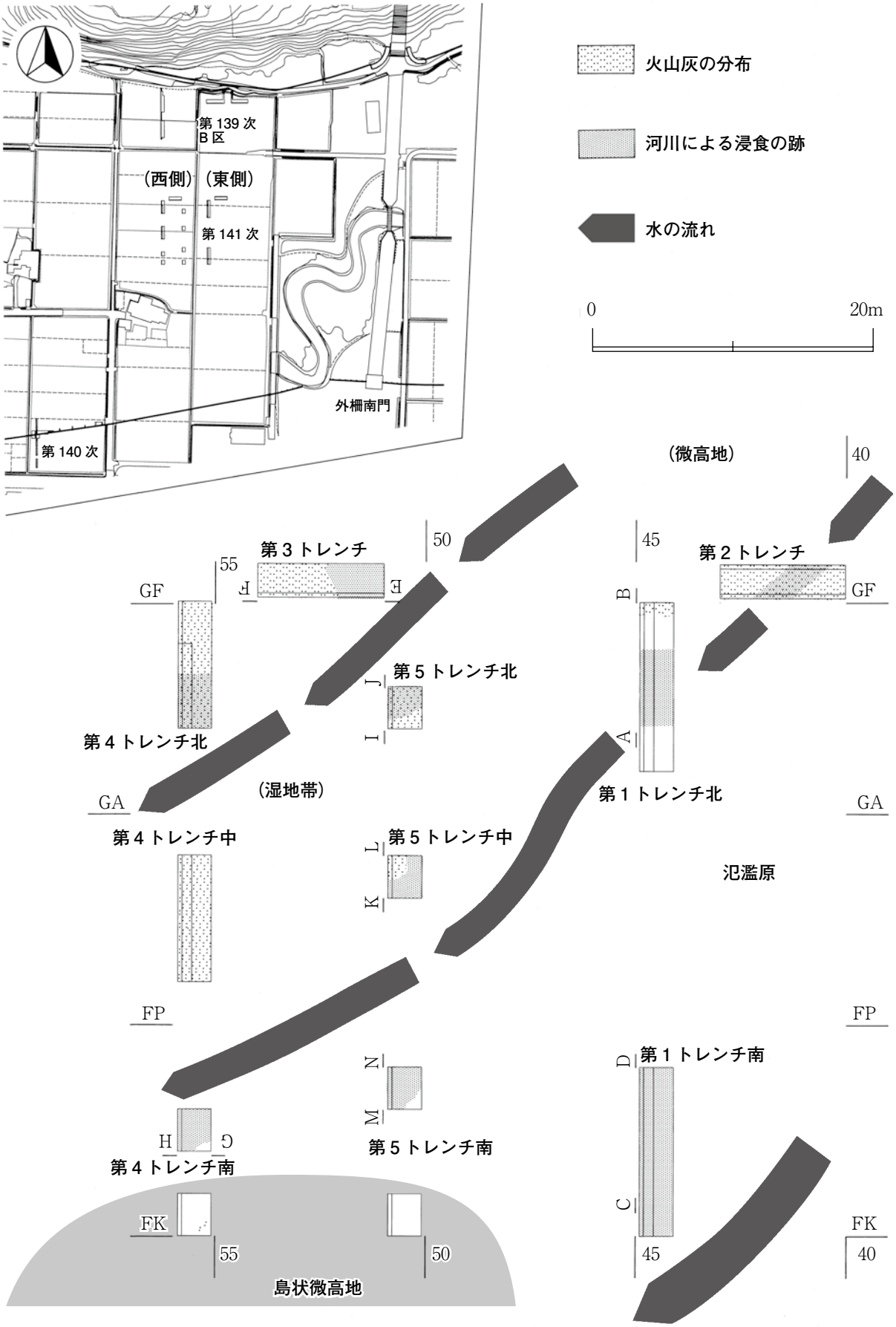
調査区は旧水田であり、標高は 33 ｍ弱である。調査を始めるにあたり、先に南大路上に復元されている河川流路および氾濫原の北限位置を把握するため、適宜南北方向にトレンチを設定した。そして調査区北辺で火山灰が分布した状態を保つ平坦地を確認したことから、面的な広がりを把握するために東西方向にもトレンチを設定し、精査を進めることにした。

調査の経過は次のとおりである。

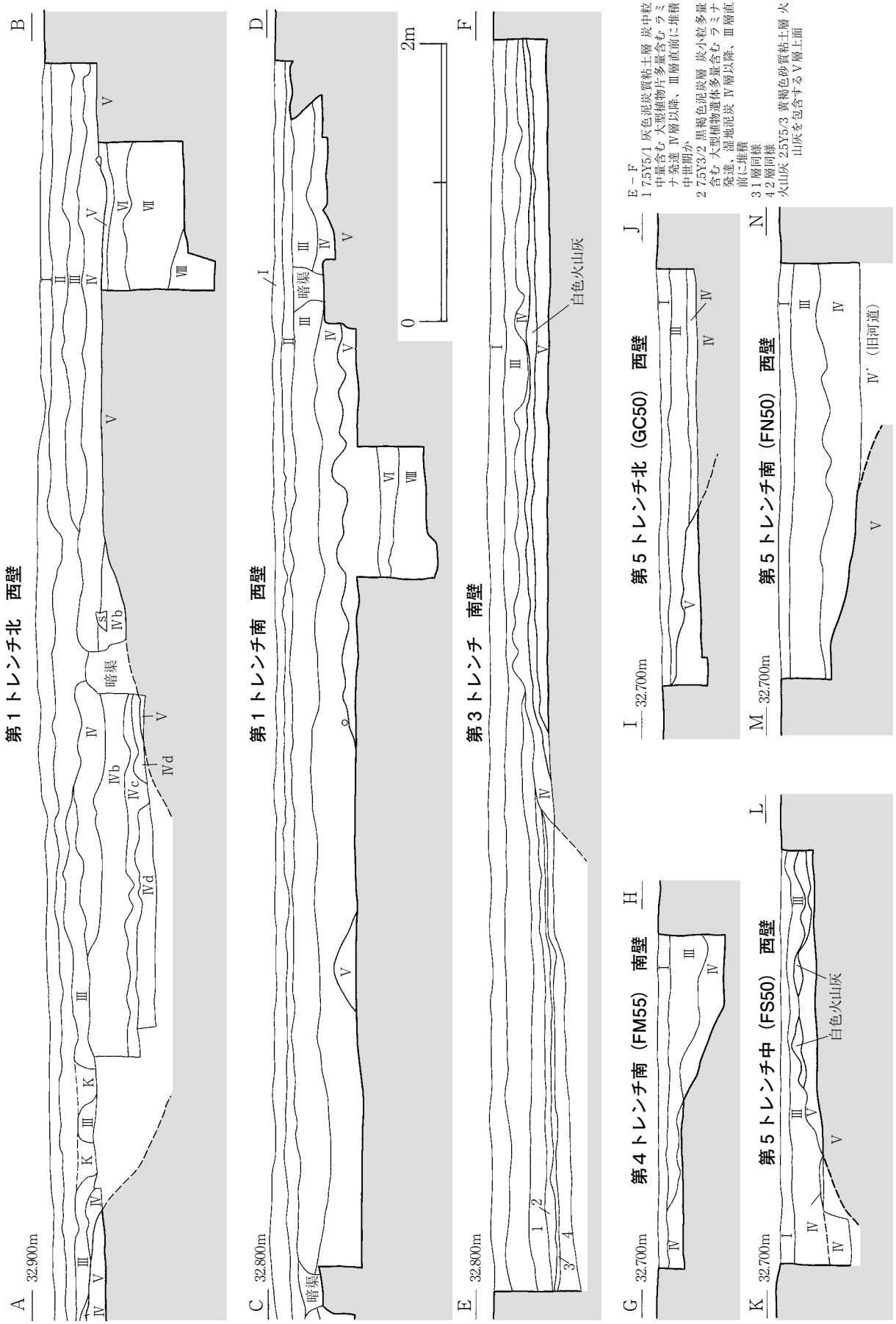
５月 31 日、テントの設営及び調査器財の準備。

６月１日、調査区東側にグリッド杭を設定し精査を開始。４日、第１トレンチの北端でⅤ層上面に十和田ａ火山灰の分布状況が確認できた。また南側に近接して河川流路を複数確認。８日、火山灰が分布する平坦地の広がりを確認するため、第１トレンチ北側に直交する第２トレンチを設定し、精査を開始する。14 日、第１トレンチは南側にかけて原地形が下がっていくが、Ⅴ層上面が凹凸し、Ⅳ層と不整合となることを確認。第 140 次調査成果との比較から 10 世紀前半代以降の河川浸食の影響と思われる。不整合面上位のⅣ層中から渡来銭（治平元寳）が出土し、Ⅲ層中から煙管が出土したことから、それぞれ中世、近世の堆積物であることが想定された。18 日、調査区西側にもグリッド杭を設定し、第２トレンチの延長線上に第３トレンチ、それと直交する第４・５トレンチを設定し精査を開始する。23 日、第３トレンチでも火山灰の分布を確認したが、若干密度が薄い。

７月２日、トレンチの全容が明らかになるとともに、北東側から南西流する複数の河道と氾濫原、湿地帯などの状態が垣間見えてきた。９日、調査区西側南端の旧宅地では、表土下に直接削平されたⅤ層を検出し、一帯が島状の微高地で河川浸食を受けず、宅地として選地されたことを確認。13 日、南大路の復元河川流路との関連を調べるため、第１トレンチの北側と南側で深掘りを実施。15 日、深掘りの結果､火山灰を上面に包含するⅤ層及び下位のⅥ層中にも遺物が包含されていることを確認。より下位には泥炭および粗粒砂を含む泥炭層が堆積し、かつてこの付近に河川流路が存在したことを裏付け。29 日、調査区の埋め戻しおよび器財の片づけを終え、調査の全工程を終了した。



第３図　調査区トレンチ詳細図



第４図　調査区トレンチ土層図

第２節　検出遺構と遺物

１　基本層序

深掘を実施した調査区東側の第１トレンチにおける層準を基本土層とした。詳細は次のとおりである。

第Ⅰ層　10YR4/4　褐色シルト層 旧水田耕作土

第Ⅱ層　10YR4/2　灰黄褐色粘土層 客土、上面がグライ化、下位は 10YR4/3(にぶい黄褐色粘土) 鋤床層

第Ⅲ層　7.5YR4/2　灰褐色シルト層 炭中粒多量含む 旧表土 煙管出土、近世期の堆積か

第Ⅳ層　7.5YR3/1　黒褐色シルト層 青灰～褐灰色粘土小ブロック多量含む 炭中～大粒多量含む 植物片多量含む 洪水堆積物 Ⅴ層と不整合、漸移的

※火山灰降灰以降の洪水堆積物 治平元寳出土、中世期の堆積か

第Ⅳｂ層　2.5Y3/3　暗オリーブ褐色シルト層 青灰～褐灰色粘土小ブロック多量含む 炭中粒多量含む 植物片多量含む 旧河道内堆積物 Ⅳ層の粗い層

第Ⅳｃ層　5Y3/2、7.5Y3/3　オリーブ黒色、暗褐色泥炭層との互層 炭中粒中量含む 植物片多量含む 止水域での堆積物か 湿地泥炭と粘土の互層、ラミナ発達

第Ⅳｄ層　2.5Y3/1　黒褐色粘土～シルト層 青灰～褐灰色粘土中粒多量含む 旧河道内堆積物Ⅳ層の細かい層

第Ⅴ層　10Y5/1　灰色粘土～シルト層 炭小粒多量含む 上面に火山灰含む Ⅳ層と不整合

※Ⅴ層上面は上からの撹乱が大きく、Ⅳ層が補整している 旧河道以南のＧＢ 44 付近は氾濫原内微高地だが火山灰は流失している 7.5YR5/6、明褐色粘土

※火山灰降灰期を下限とする洪水堆積物 遺物を包含する 概ねＧＥライン以北には面的に火山灰が分布している

第Ⅵ層　5Y4/1　灰色粘土～シルト層 炭小粒多量含む 洪水堆積物 遺物を包含する

第Ⅶ層　5Y3/2　オリーブ黒色泥炭質粘土層 炭小粒中量含む 植物片多量含む

第Ⅷ層　2.5Y3/1　黒褐色泥炭層 粗粒砂中量含む 植物細片多量含む 流路にごく近い後背湿地か

２　検出遺構と遺物

第 141 次調査地は、第 109 次調査の電気探査により想定された氾濫原縁辺と、長森丘陵裾部との境界付近にあたる。第１～５トレンチを設定し精査を進め、氾濫原(河川敷)を含む河川跡以外、遺構等は検出できなかったが、遺物は一定量出土した。調査区中央を堰が南流し区切られているため、便宜上調査区を東西に分けて東側／西側調査区と呼称する。(第３図)

東側調査区では、南北方向に第１トレンチ、東西方向に第２トレンチを設定した。第１トレンチは北と南に２分されるが、第１トレンチ北の北端部ではⅤ層上面で火山灰の分布を確認した。以南にかけては小河川跡が入り、トレンチ南端では若干高くなるが、河川浸食により火山灰は流失している。第１トレンチ南は全域が河川浸食を強く受けて火山灰が流失し、凹凸したⅤ層上面をⅣ層が補整する不整合となっていた。Ⅳ層中から治平元寳が出土し、中世期までの堆積物と考えられる。Ⅳ層は十和

田ａ火山灰の降灰を上限とするため、10 世紀前半代以降河川による浸食と堆積が進んだと思われる。第２トレンチは第１トレンチ北に接続する小河道を含むものの、ほぼ全域で火山灰が分布しており、長森丘陵から続く裾部の末端がこの付近であることが想定される。

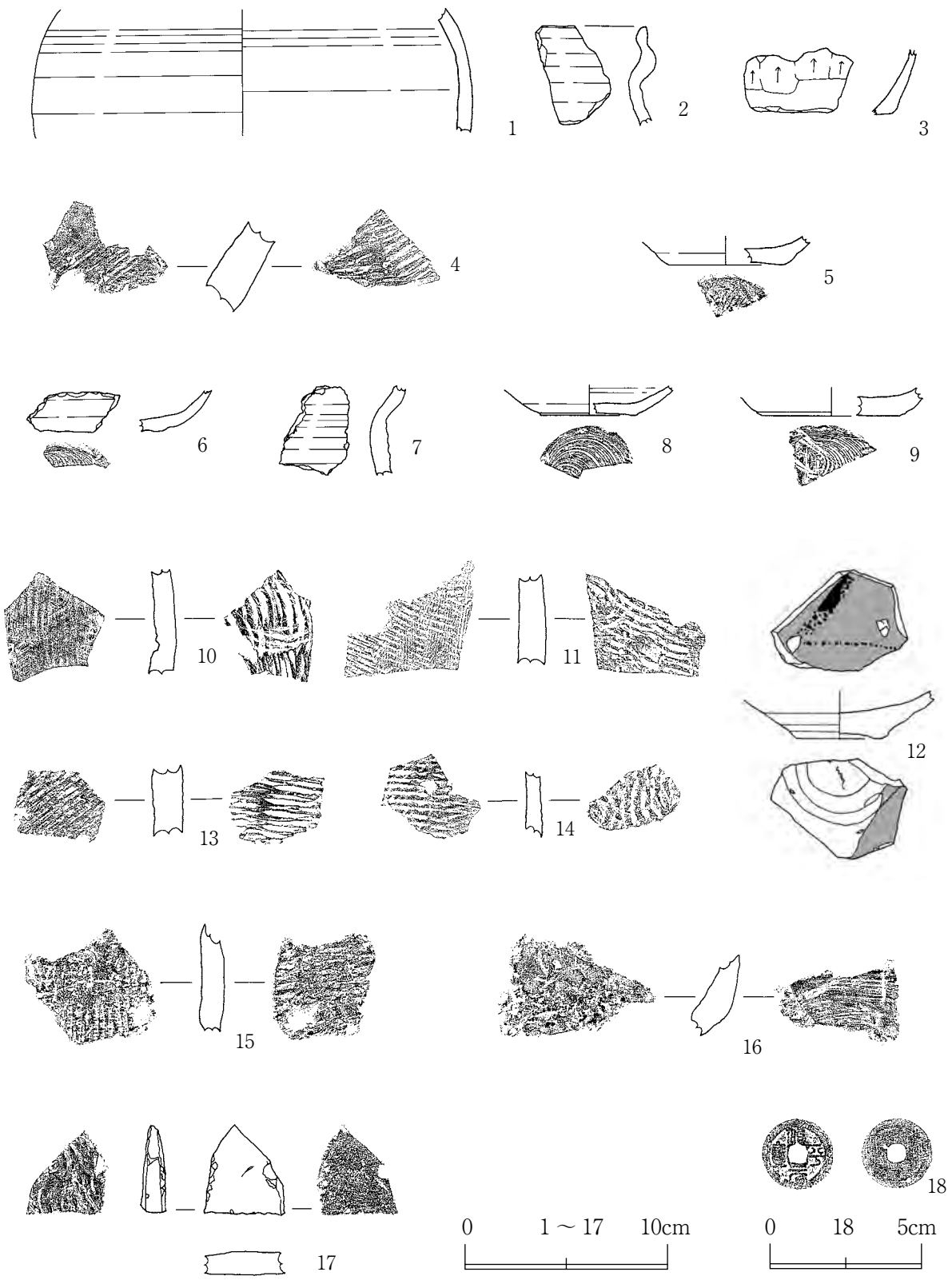
西側調査区では東西方向に第２トレンチの延長線で第３トレンチ、南北方向には第４・５トレンチを設定した。第３トレンチは東側に地形が下がって小河道が入り、この部分では火山灰が流失していた。第４トレンチは北・中央・南に３分されるが、第４トレンチ北は火山灰が分布したうえで地形が南側に下がり、第４トレンチ中央との間に小河道が入る。第５トレンチ北は火山灰が分布するが、地形は北側に下がるため、第３トレンチ東側と河道を挟む位置となる。第５トレンチ中央は南側に地形が下がり、第５トレンチ南（ＦＮ 50）との間に小河道が入る。第４トレンチ南では第４トレンチ中央に向かい河道が入るが、旧宅地である南端のＦＫ 35 グリッドでは微高地となり、削平を受けたＶ層が直接耕作土（表土）の直下となる。部分的に火山灰ブロックが残ることから、第４～５トレンチ南（ＦＫ 55 ～50）付近一帯は火山灰が流失しない、氾濫原内に島状に残る微高地であったと考えられる。

西側調査区では北半部に火山灰分布が認められ、若干の河川浸食はあるものの、火山灰は流失せずに残っている。しかしその平面密度は東側調査区北辺に比べて薄く、また上下方向で 10cm 程度の拡散が認められる。これは踏圧または若干の水流による巻き上げ等による撹乱と思われるが、付近一帯が東側調査区に比して相対的に流れがほとんど無く、浸食も少ない止水域である可能性が想定できる。これは第 139 次調査Ｂ区第１トレンチの所見に調和的である。

遺構外出土遺物

出土遺物としては縄文土器・剥片、須恵器（坏・壺甕）・土師器（坏・甕）・箸・付け木・加工木・モモ核、銭貨、鉄砲玉・煙管・近世陶磁器が出土した。

	出土位置	器　種	外面調整	内面調整	底面調整	外面色調	備　　考
第５図１	GE44 深堀 Ⅵ層	須恵器壺	ロクロ目	ロクロ目	－	灰色	
第５図２	FM44 深堀 Ⅴ層	土師器甕	ロクロ目	ロクロ目	－	にぶい黄橙色	
第５図３	FK50 Ⅴ層中	土師器甕	ケズリ	ナデ？	－	にぶい黄橙色	非ロクロ調整
第５図４	FK44 Ⅳ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	暗オリーブ灰色	
第５図５	FK44 Ⅳ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	－	にぶい黄橙色	磨滅
第５図６	FK50 Ⅲ層	須恵器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	灰白色	
第５図７	FK50 Ⅲ層	須恵器壺	ロクロ目	ロクロ目	－	明オリーブ灰色	
第５図８	FK50 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	にぶい黄橙色	
第５図９	FN44 Ⅲ層	土師器坏	ロクロ目	ロクロ目	回転糸切り	黄褐色	
第５図 10	FK55 Ⅲ層	須恵器甕	格子叩き目	平行アテ具	－	灰色	
第５図 11	GF42 Ⅲ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	褐灰色	
第５図 12	GC50 Ⅲ層	肥前陶器皿	ロクロ目	釉、鉄絵	高台	明赤褐色	絵唐津、胎土目
第５図 13	FK50 Ⅰ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	灰色	
第５図 14	FK50 Ⅰ層	須恵器甕	平行叩き目	青海波アテ具	－	灰オリーブ色	
第５図 15	FS55 Ⅰ層	須恵器甕	平行叩き目	平行アテ具	－	褐色	
第５図 16	FK50 Ⅰ層	土師器甕	？	ケズリ	－	黄褐色	非ロクロ調整
第５図 17	FK50 Ⅰ層	須恵器甕	二次加工磨り	平行アテ具→磨り	－	灰色	紡錘車か？
第５図 18	FM44 Ⅳ層	銭貨					治平元寶



第５図　遺構外出土遺物

第３節　自然科学的分析

はじめに

払田柵跡は９世紀前後の城柵跡であり、仙北平野中央部の真山丘陵と長森丘陵を中心として立地する。これまでの自然科学的な分析調査により、城柵内外の植生や植物利用に関する資料が蓄積されつつある。

今回は、大路地区西部に当たる第 141 次調査区の堆積物を対象に古代の頃の植生に関する資料を得るために、花粉分析と植物珪酸体分析を実施した。

１　試料

試料は、第 141 次調査区壁面に見られた土層である。

この中から、５つの層位 (Ⅳ層～Ⅷ層) で土壌試料が各１点ずつ採取された（第４表）。

第４表　第 141 次調査区の分析試料

試料番号	調査次数	出土遺構	出土位置等	分析項目・試料		備考
				花粉	植物珪酸体	
1	DHT141次	FM44	Ⅳ層		1	
2･6	DHT141次	GE44	Ⅴ層	6	2	To-a 直下
3･7	DHT141次	GE44	Ⅵ層	7	3	
4	DHT141次	GE44	Ⅶ層		4	
5	DHT141次	GE44	Ⅷ層		5	

＊：試料番号２・６と試料番号３・７は , それぞれ同一の土壌試料である。

Ⅴ層の試料は試料番号２と６、Ⅵ層の試料は試料番号３と７に分割された。いずれの層位も時代的には古代とされる。なお、Ⅴ層の直上には西暦 915 年とされる十和田 a テフラ (To-a) が確認されている。今回の分析では、試料番号６・７について花粉分析を、５点全点について植物珪酸体分析を実施する。

２　分析方法

（１）花粉分析

試料約 10g について、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液 (臭化亜鉛，比重 2.3) による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス (無水酢酸９：濃硫酸１の混合液) 処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400 倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本や島倉 (1972)、中村 (1980) 等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフォンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

（２）植物珪酸体分析

湿重 5g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法 (ポリタングステン酸ナトリウム，比重 2.5) の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部 (葉身と葉鞘) の葉部短細胞に由来した植物珪酸体 (以下､短細胞珪酸体と呼ぶ) および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体 (以下、

機動細胞珪酸体と呼ぶ)、およびこれらを含む珪化組織片を近藤(2010)を参考に同定し、計数する。

結果は、検出された分類群とその個数の一覧表で示す。

3　結果

(1)花粉分析

結果を第５表、第６図に示す。

試料番号6(Ⅴ層)と7(Ⅵ層)のいずれからも花粉化石が豊富に産出し、保存状態も比較的良好である。

木本花粉についてみると、層位により優占する種類は異なるものの、いずれの試料でも多産する種類は類似しており、スギ属、ハンノキ属が多産し、マツ属、サワグルミ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属等を伴う。

草本花粉では、イネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、キク亜科等を伴う。その他にも、サジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ミツガシワ属、デンジソウ属等の水湿地生草本・シダ植物に由来する花粉・胞子もわずかに検出される。

なお、試料番号6では花粉化石の他に回虫卵がわずかに認められる。

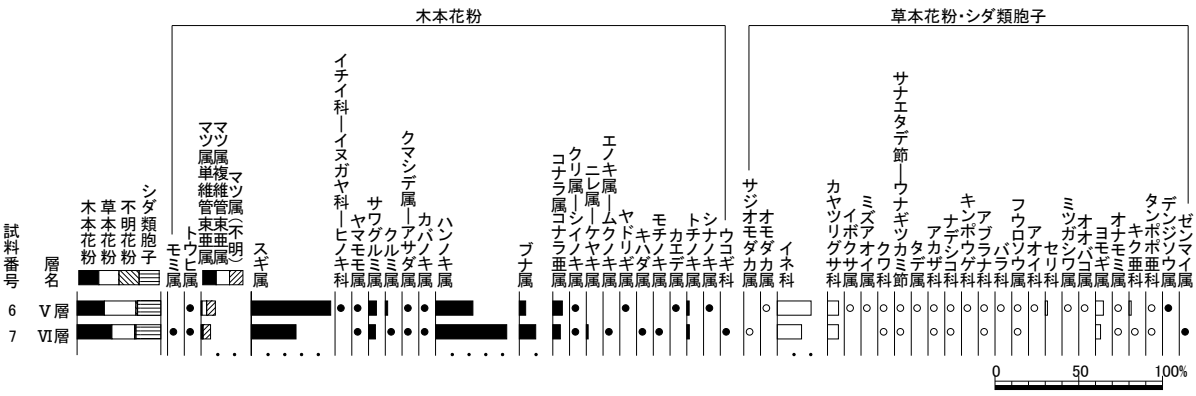
第６表　第141次調査区の植物珪酸体分析結果

種　類	FM44	GE44			
	Ⅳ層	Ⅴ層	Ⅵ層	Ⅶ層	Ⅷ層
試料番号	1	2	3	4	5
イネ科葉部短細胞珪酸体					
イネ族イネ属	12	1	1	−	−
タケ亜科クマザサ属	3	3	−	−	−
タケ亜科	1	2	6	2	4
ヨシ属	14	1	2	10	20
イチゴツナギ亜科	2	2	−	−	−
不明	12	6	2	4	5
イネ科葉身機動細胞珪酸体					
イネ族イネ属	14	1	2	−	−
タケ亜科クマザサ属	7	2	1	−	−
タケ亜科	5	1	4	1	1
ヨシ属	20	1	6	8	4
不明	27	8	4	8	8
合　計					
イネ科葉部短細胞珪酸体	44	15	11	16	29
イネ科葉身機動細胞珪酸体	73	13	17	17	13
総　計	117	28	28	33	42
珪化組織片					
イネ属穎珪酸体	＊	−	−	−	−
イネ属短細胞列	＊＊	−	＊	−	−

−：未検出，＊：検出，＊＊：多い

第５表　第141次調査区の花粉分析結果

種　類	GE44	
	Ⅴ層	Ⅵ層
試料番号	6	7
木本花粉		
モミ属	−	1
トウヒ属	1	1
マツ属単維管束亜属	1	2
マツ属複維管束亜属	6	1
マツ属（不明）	11	12
スギ属	100	71
イチイ科−イヌガヤ科−ヒノキ科	1	−
ヤマモモ属	1	1
サワグルミ属	10	11
クルミ属	3	1
クマシデ属−アサダ属	1	1
カバノキ属	2	1
ハンノキ属	47	113
ブナ属	8	26
コナラ属コナラ亜属	12	12
クリ属−シイノキ属	1	1
ニレ属−ケヤキ属	−	3
エノキ属−ムクノキ属	−	1
ヤドリギ属	1	−
キハダ属	−	1
モチノキ属	−	1
カエデ属	1	−
トチノキ属	3	4
シナノキ属	1	−
ウコギ科	−	1
草本花粉		
サジオモダカ属	−	1
オモダカ属	1	−
イネ科	128	91
カヤツリグサ科	42	41
イボクサ属	1	−
ミズアオイ属	1	−
クワ科	3	5
サナエタデ節−ウナギツカミ節	3	3
タデ属	1	−
アカザ科	2	2
ナデシコ科	4	1
キンポウゲ科	1	−
アブラナ科	2	1
バラ科	1	−
フウロソウ属	1	1
アオイ科	1	−
セリ科	8	
ミツガシワ属	1	−
オオバコ属	1	−
ヨモギ属	30	19
オナモミ属	2	3
キク亜科	8	3
タンポポ亜科	1	1
不明花粉	13	10
シダ類胞子		
デンジソウ属	2	−
ゼンマイ属	−	6
他のシダ類胞子	178	184
合　計		
木本花粉	211	266
草本花粉	243	172
不明花粉	13	10
シダ類胞子	180	190
総計（不明を除く）	634	628
その他		
回虫卵	1	−



第６図　第 141 次調査区における花粉化石群集の層位分布

出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より
不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満を示す。

（２）植物珪酸体分析

結果を第６表に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、概して検出個数が少ない。また保存状態が悪く、表面に多数の小孔（溶食痕）が認められる。

試料番号５（Ⅷ層）や４（Ⅶ層）では、ヨシ属やタケ亜科などがわずかに認められるに過ぎない。

試料番号３（Ⅵ層）や２（Ⅴ層）では、ヨシ属やクマザサ属を含むタケ亜科とともに栽培植物であるイネ属が認められる。試料番号３のイネ属には珪化組織片も認められ、葉部に形成される短細胞列が見られる。

試料番号１（Ⅳ層）では、イネ属やヨシ属の産出が目立ち、クマザサ属を含むタケ亜科やイチゴツナギ亜科などが認められる。イネ属には珪化組織片として、短細胞列の他に籾（穎）に形成される穎珪酸体も見られる。

４　考察

（１）森林植生

第 141 次調査区では、Ⅴ層の直上に To-a が確認され、Ⅷ層～Ⅳ層は古代とされる。周辺の森林植生を反映する種類を見ると、木本類ではスギ属、ハンノキ属が多産し、マツ属、サワグルミ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、トチノキ属等を伴う。このうち、多産するハンノキ属は河畔や低湿地などの適湿地に林分を形成する種を含む分類群であり、またヤマモモ属、サワグルミ属、クルミ属、クマシデ属－アサダ属、ニレ属－ケヤキ属、トチノキ属、シナノキ属等も同様な生育環境を示す種を含む。同じく多産するスギ属は水分や養分の供給が十分で、水はけの良い土壌で最もよく生育するとされている。ブナ属やコナラ亜属は、冷温帯性落葉広葉樹林の主要構成要素である。

西暦 915 年以前のⅥ層やⅤ層が堆積した頃の調査区周辺では、烏川や丸子川等の河畔や低湿地にハンノキ属等から成る湿地林が分布しており、部分的にスギ属の林分も分布していたと推測される。また周辺丘陵部や後背山地はブナ属を主体とする落葉広葉樹林が主体であり、部分的にトウヒ属、マツ属等の針葉樹も分布していた可能性がある。

本地域の潜在自然植生は、真昼山地等の後背山地や丘陵部ではチシマザサ－ブナ群団であり、丘陵縁辺部などはオオバクロモジ－ミズナラ群集、低地や河畔沿いなどはハルニレ群集、エゾエノキ－ケヤキ群集、ハンノキ－ヤチダモ群集とされている（宮脇編著,1987）。またスギ属は約 4,000 ～2,000 年

前にかけて全国で急増し、特に日本海沿岸地域の低地においてはスギの埋没林が多く認められている(例えば高原,1998 など)。秋田県も例外ではなく、約 3,000 年前はブナ属やコナラ亜属が優勢な冷温帯性落葉広葉樹林であったが、約 2,700 ～2,000 年前にスギ属が急増し、落葉広葉樹と混生した森林が形成されたとしている(辻･日比野,1975;川村,1977･1979;高原,1998 など)。今回の結果も既存のデータと調和的であり、検出された分類群は上記の潜在自然植生を反映するものと思われる。

これまで本遺跡で行われた自然科学分析調査では、To-a 降灰以前のものに第 130 次調査区(外郭ホイド清水東側)や第 134 次調査区(南東低地部)での花粉分析結果がある。それによれば、To-a 降灰より以前の後背山地や丘陵にはブナ属を主体とした冷温帯性落葉広葉樹林および部分的にスギ属等の針葉樹、標高のやや低い部分や丘陵縁辺などにコナラ亜属等、河畔や低湿地にハンノキ属等が生育していたことが指摘されている。今回の結果も、これらの結果と調和的である。

(２)低地の植生

調査区内あるいは周囲の植生についてみると、草本類ではイネ科が最も多く産出し、カヤツリグサ科やヨモギ属等が検出される。これらは、いずれも開けた明るい場所を好む「人里植物」を多く含む分類群であり、その他にもクワ科、サナエタデ節－ウナギツカミ節、アカザ科、ナデシコ科、アブラナ科、オナモミ属、キク亜科等、同様の生育環境を示す種群が多く認められている。当時の調査区周辺には、これらが生育するような開けた草地が存在したと想定される。イネ科に由来した植物珪酸体も検出されており、イネ科の中でヨシ属やイチゴツナギ亜科などが含まれていたと思われる。またサジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、ミツガシワ属等の水湿地生草本、デンジソウ属等の水生シダ類も検出される。多産するイネ科やカヤツリグサ科、セリ科にも水湿地に生育する種が含まれる。そのため、調査区周辺に草本類やシダ類が生育できる水湿地の存在がうかがえる。Ⅷ層やⅦ層ではヨシ属の産出が目立ち、Ⅵ層が形成される以前にも水湿地が存在したと思われる。なおⅧ層～Ⅳ層では植物珪酸体の検出個数が少なく、土層が形成される際に植物遺体が混入しにくかった状態にあったと考えられる。同様な傾向は東側に隣接する第 140 次調査区のⅣ層やⅤ層でも見られており、大路地区西側から外柵線地南側にかけてイネ科の生育量が少なかったと思われる。この要因として除草など人為的な要因が考えられるが、今後さらに城柵跡での植生に関する情報を蓄積し、堆積環境などを含めて検討したい。また、Ⅵ層～Ⅳ層ではクマザサ属を含むタケ亜科も認められた。第 140 次調査区では後背山地や丘陵部に生育するチシマザサ(クマザサ属の一種)に由来する可能性が推定されており、隣接する今回も同様な由来と思われる。

ところで、低地の植生については、調査区によって差異が見られる。第 130 次調査区では To-a 降灰より以前ではハンノキ属を主体とする湿地林が形成されていた可能性がある。第 134 次調査区では外柵の内側で人里植物を含む草地が想定されたのに対して、外側では水湿地生の草本類に由来する花粉が検出され、柵列の内側と外側の環境の差を示している可能性が指摘された。今回の第 141 次調査区は草地であり、周辺に水湿地の存在も想定された。

(３)稲作

Ⅵ層～Ⅳ層では栽培植物のイネ属が検出された。隣接する第 140 次調査区では古代とされる層位で稲作を示唆する可能性が指摘され、今回のイネ属の検出からも同様な可能性が想定される。今回の層位が第 140 次調査区よりも下位に相当するならば、より古い時期から稲作が存在したことも考えら

れる。なお、第 130 次調査区や第 130・140 次調査区 (外柵線地南辺中央西側) の調査結果によると、To-a 降灰以降に稲作地の拡大などの可能性が想定される。今後、各調査区の堆積物を対比するとともに、分析調査の成果を比較・検討し、さらに遺構の分布や変遷も考慮して、払田柵が機能していた頃や前後の時期の自然環境や農耕、植物利用について検討したい。

なお今回の調査では、Ｖ層から回虫卵がわずかに検出された。しかし、現段階では土層への混入の要因は明確にならない。今後さらに回虫卵など寄生虫卵の空間的、層位的分布を調べるとともに、周囲に分布する遺構の種類を含めて検討することで当時の食糧事情や汚水処理の状況を検討する上で有益な情報が得られる可能性がある。

引用文献

川村　智子 ,1977, スギ (Cryptomeria japonica) の分布に関する花粉分析的研究 (Ⅰ . 秋田県). 花粉 ,11,8-20,

川村　智子 ,1979, 東北地方における湿原堆積物の花粉分析的研究 − とくにスギの分布について − . 第四紀研究 , 18,79-88.

近藤　錬三 ,2010, プラント・オパール図譜 . 北海道大学出版会 ,387p.

宮脇　昭 (編著),1987, 日本植生誌　東北 . 至文堂 ,605p.

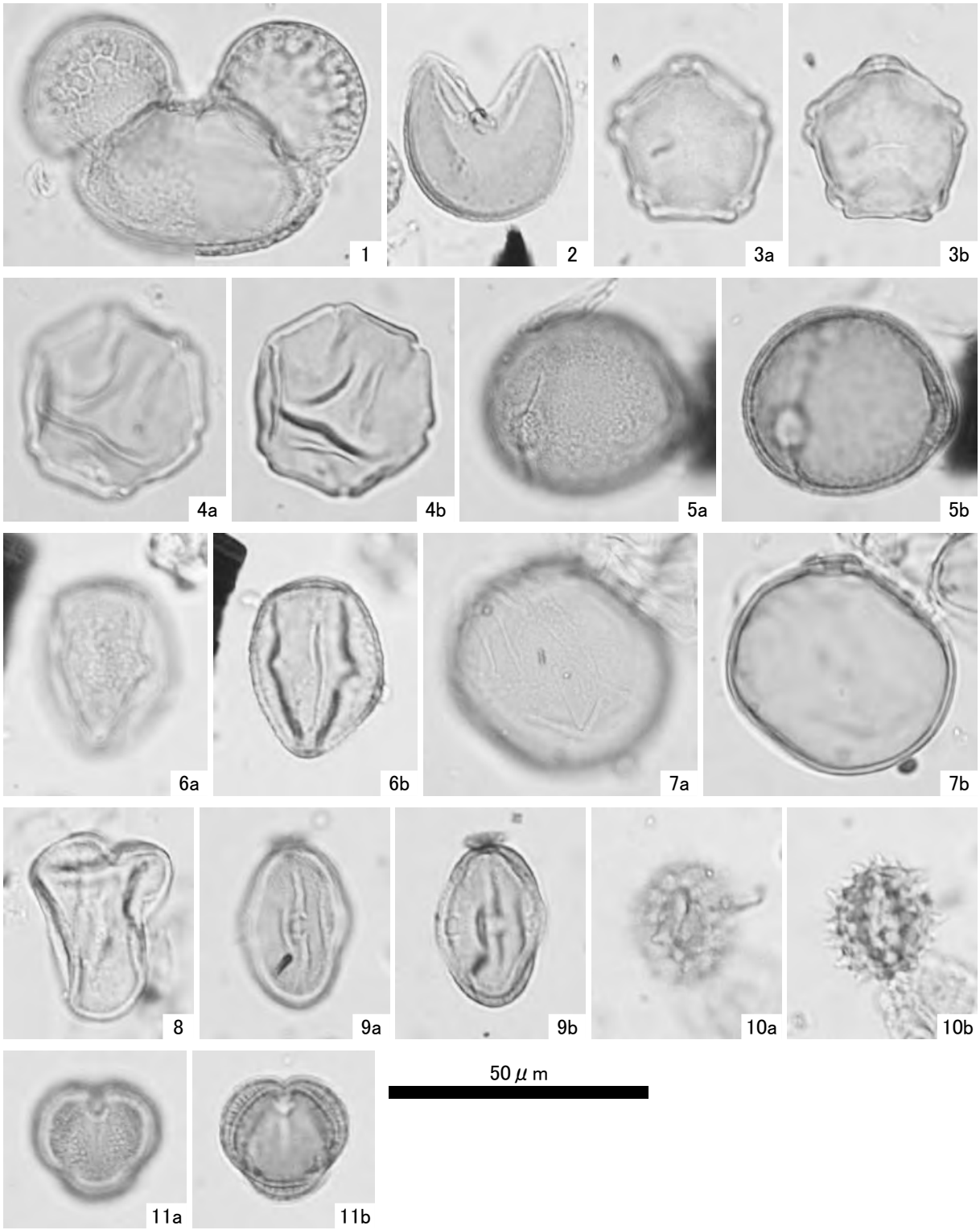
中村　純 ,1980, 日本産花粉の標徴　Ⅰ　Ⅱ (図版). 大阪市立自然史博物館収蔵資料目録　第 12,13 集 ,91p.

島倉　巳三郎 ,1973, 日本植物の花粉形態 . 大阪市立自然科学博物館収蔵目録　第５集 ,60p.

高原　光,1998, スギ林の変遷 . 安田　喜憲・三好　教夫 (編著), 図説　日本列島植生史 , 朝倉書店 ,207-223.

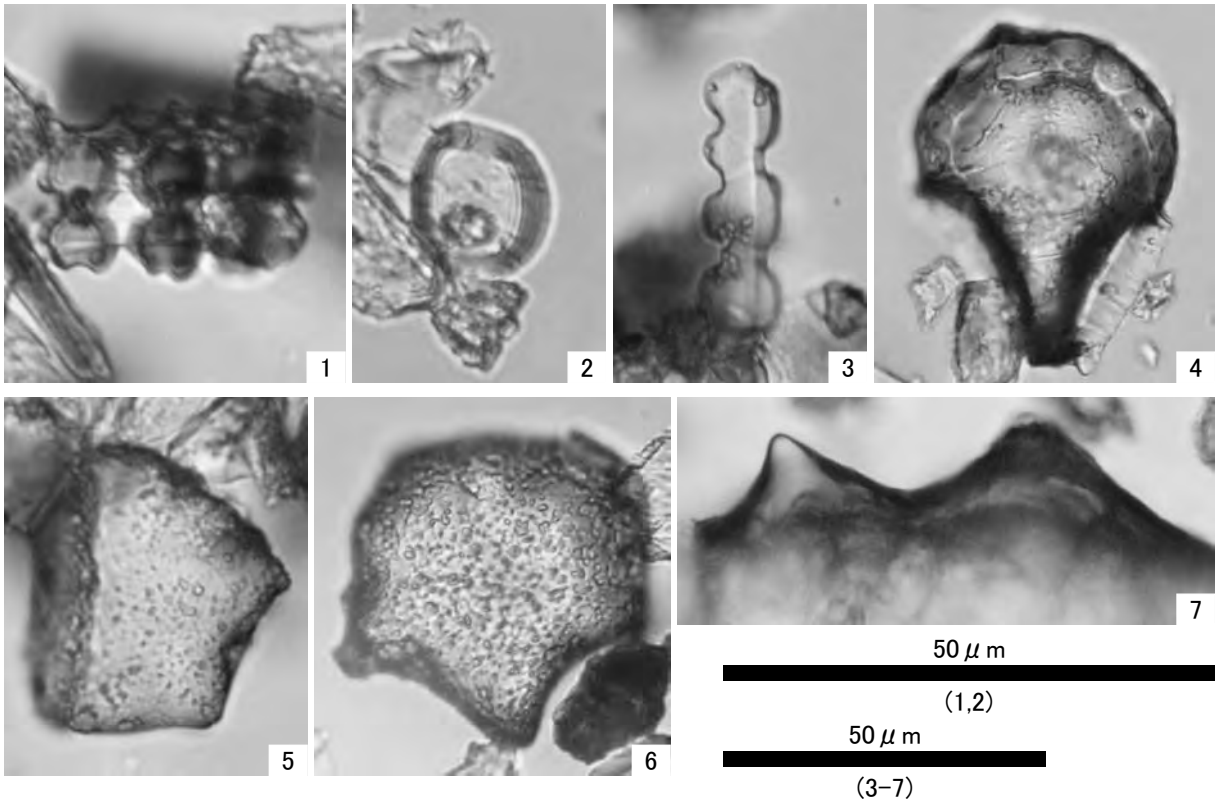
辻　誠一郎・日比野　紘一郎 ,1975, 秋田県女潟における花粉分析学的研究 . 第四紀研究 ,14,151-157.

図版1　花粉化石



1．マツ属(GE44 Ⅴ層;6)
2．スギ属(GE44 Ⅴ層;6)
3．ハンノキ属(GE44 Ⅴ層;6)
4．サワグルミ属(GE44 Ⅵ層;7)
5．ブナ属(GE44 Ⅴ層;6)
6．コナラ属コナラ亜属(GE44 Ⅴ層;6)
7．イネ科(GE44 Ⅴ層;6)
8．カヤツリグサ科(GE44 Ⅴ層;6)
9．セリ科(GE44 Ⅴ層;6)
10．キク亜科(GE44 Ⅴ層;6)
11．ヨモギ属(GE44 Ⅴ層;6)

図版2　植物珪酸体



1．イネ属短細胞列(FM44 Ⅳ層;1)
2．ヨシ属短細胞珪酸体(GE44 Ⅷ層;5)
3．イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(GE44 Ⅴ層;2)
4．イネ属機動細胞珪酸体(GE44 Ⅵ層;3)
5．クマザサ属機動細胞珪酸体(FM44 Ⅳ層;1)
6．ヨシ属機動細胞珪酸体(GE44 Ⅶ層;4)
7．イネ属穎珪酸体(FM44 Ⅳ層;1)

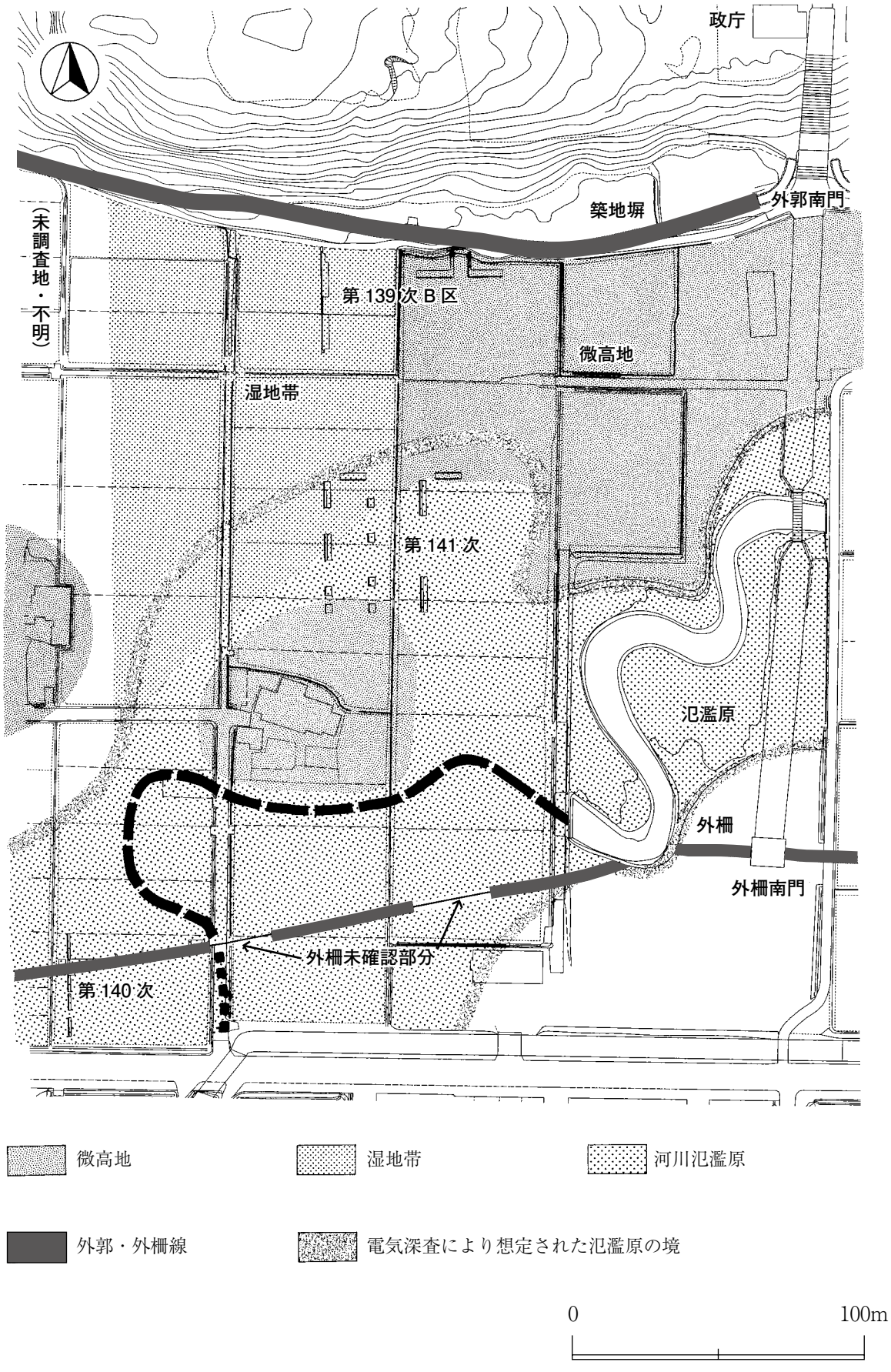
第４節　小結

払田柵跡の沖積地部については、長森南側の大路周辺と北側の北門・外郭材木塀周辺の様相が明らかになっているだけで、多くは手つかずの状態である。しかし史跡南東側に隣接する厨川谷地遺跡の調査により、沖積地部にも払田柵跡の関連領域が広がることを確認され、また長森南東側でのほ場整備の際に実施した用排水路・農道部分の調査では、複数の河川流路に挟まれた微高地や湧水点で祭祀遺構を検出し、外柵に囲まれた低湿な沖積地部についても様相が少しずつ明らかになりつつある。

今年度の調査区からは、河川跡以外の遺構等を検出することはできなかったが、昨年度実施の第139次調査Ｂ区及び第140次調査の結果との比較検討により、大路地区西側における河川の変遷をある程度復元することが可能となった。

調査の結果、長森丘陵の裾部に広がる微高地と、その南側を浸食した氾濫原（河川敷）との境界を確認し、氾濫原内を南西流する複数の小河川跡を確認できた。調査区東側の北辺では、一定の平坦面をつくるＶ層の上面に、火山灰ブロックが面的に広がる状況を確認できたが、以南の範囲では河川浸食により火山灰が流失し、Ｖ層の上面が凹凸した状況を確認できた。Ｖ層中には遺物が包含されることから、火山灰降灰を下限とする洪水堆積物であることが確認された。この地層は長森丘陵北側や厨川谷地遺跡でも確認されている。またⅥ層の中にも遺物が包含されることから、同様に払田柵創建以降の堆積物と考えられる。さらに下位には、粗粒砂が混じる黒色泥炭層を確認したことから、科学分析結果と併せ、初めこの付近にあった河川流路が、時期を経て南方へ変遷したと考えられる。調査区西側の北半では小河川の影響を受けながらも火山灰が分布するが、ここでは上下に10cm程度の幅を持って拡散しており、面的な分布も薄くなる傾向が確認できることから、調査区東側に比べ流水の影響が極めて少ない止水域（湿地帯）のような状態であったと想定される。また南端部の旧宅地周辺だけは、削平を受けたＶ層が直接表土に覆われており、島状の微高地であったことが確認できた。第141次調査区の北東側には河川浸食の影響を受けていない平坦地が広がる可能性が高い。

図版３
長森南西側に広がる湿地帯
（想定写真）



第７図　大路地区西側沖積地概念図

図版4

調査区東側状況（北→）
第141調査区の東側では、第１トレンチ北端及び第２トレンチで十和田ａ火山灰が分布し、河川氾濫の影響を受けていないことが確認された。

調査区西側状況（北→）
調査区西側では、北半部に火山灰が分布するものの極めて湿潤であり、東側に比べて水の動きが少ない止水域（湿地帯）であったことが想定される。

火山灰検出状況（南→）
調査区東側の第１トレンチ北では、北端部でＶ層上面に火山灰が分布しており、遺物も包含されるため、降灰期を下限とする洪水堆積物であることが確認された。

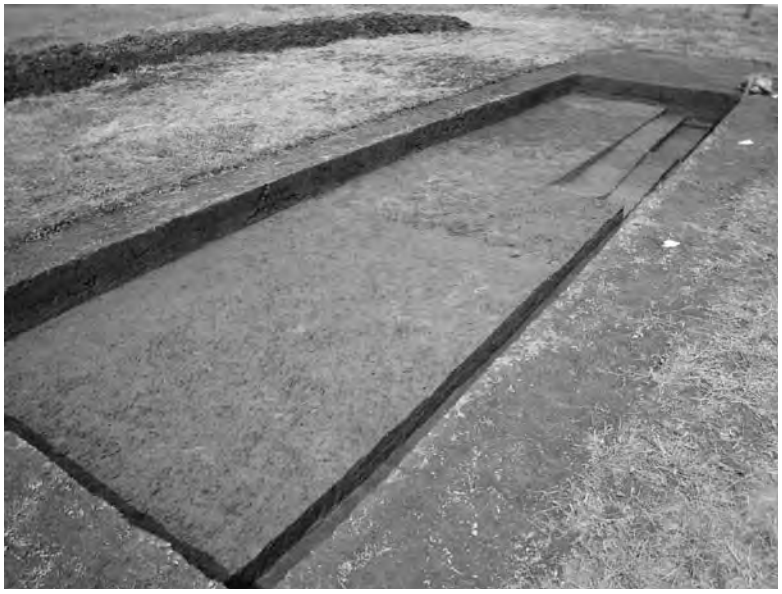
図版５

小河川跡検出状況（北東→）
第１トレンチ北の中央（ＧＣ 44）付近に比較的大きい小河川跡が埋没していた。以南では河川浸食により火山灰は滅失している。

第１トレンチ南（ＦＭ 44）の深掘状況（東→）
上面に火山灰を分布するＶ層直下のⅥ層にも遺物が包含されるため、創建期以降の堆積物と考えられる。より下位では粗粒砂を包含する泥炭層となる。

第２トレンチの浸食状況（東→）
図版５上の小河川跡の上手にあたる。火山灰を上面に包含するＶ層は第１トレンチ北端から北東側では安定しており、この付近が氾濫原との境となっている。

図版6



第３トレンチ状況（南西→）
調査区西側の第３トレンチでは火山灰が分布するも湿潤で、東端部は小河川の浸食を受けている。

調査区西側北半部の状況（北→）
第３トレンチ及び第４トレンチ北･中には比較的火山灰が分布しているが、小河川が多く関わり極めて湿潤である。火山灰も上下 10cm 程度の幅を持って拡散しており、湿地帯の様相を呈する。

ＦＮ 50 付近の河川浸食状況（東→）
第４・５トレンチ南等、調査区西側の南半部は北半部に比べ河川浸食の影響を大きく受けて、火山灰も滅失している。しかし氾濫原内の島状微高地に近いため、浸食の度合いは調査区東側ほどではない。

図版７

氾濫原内に残る島状微高地（北→）
第５トレンチ南（ＦＫ 50）では、削平を受けたＶ層が直接表土直下となっており、周囲より高い島状微高地となっている。ここから第４トレンチ南（ＦＫ 55）付近以南は旧宅地となっており、沖積地内の微高地を宅地として利用したものであろう。

調査区近景（南西→）
調査区は復元整備された河川跡の北西側にあたる。第 139 次Ｂ区で確認された盛土整地地業及び丘陵裾部の広がりについては、第 141 調査地の北東側に限定される。

調査区近景（北西→）
調査区西側は東側に比べ低く湿潤である。しかし丘陵裾部以外に氾濫原内の島状微高地も存在し、洪水堆積物の面的把握も含め今後も沖積地部の調査を進めることが必要である。

第４章　檜山安東氏城館跡(大館跡)調査

１　遺跡の概要と調査の目的

遺跡の概要

大館跡は史跡檜山安東氏城館跡(檜山城跡・大館跡・茶臼館跡)の一部をなし、昭和 46 ～51 年度にかけて学校移転計画に先立つ発掘調査が行われ、調査の結果、平安時代の大規模な集落跡と土塁・空堀等が良好な状態で検出された。平安時代の集落は出土遺物から概ね９世紀後半～10 世紀代と考えられるが、日本三代実録にある「野代営」擬定地の一つとしても考えられている。

能代市教育委員会による調査の結果、台地上に広がる大集落と柵列・土塁・空堀等が検出された。土塁・空堀は台地中央を横断するもの及び南側を区切る大型のもの、台地縁辺を区切るもの等が確認されている。空堀は平安時代の竪穴建物跡を一部削平して構築されていたこと、またその削土を利用して土塁が構築されていたこと、そしてその規模の大きさから、檜山城の支城的役割を果たした中世安東氏に関連する城館群の一部として昭和 55 年３月に国史跡指定を受けた。

遺跡は米代川及び支流の檜山川に挟まれた台地上に立地し、近年は高速道路(琴丘能代道路)建設に伴う発掘調査により、近隣で複数の大規模な平安時代集落が調査されている。第８図に周辺遺跡の詳細と立地状況を示す。

調査の目的

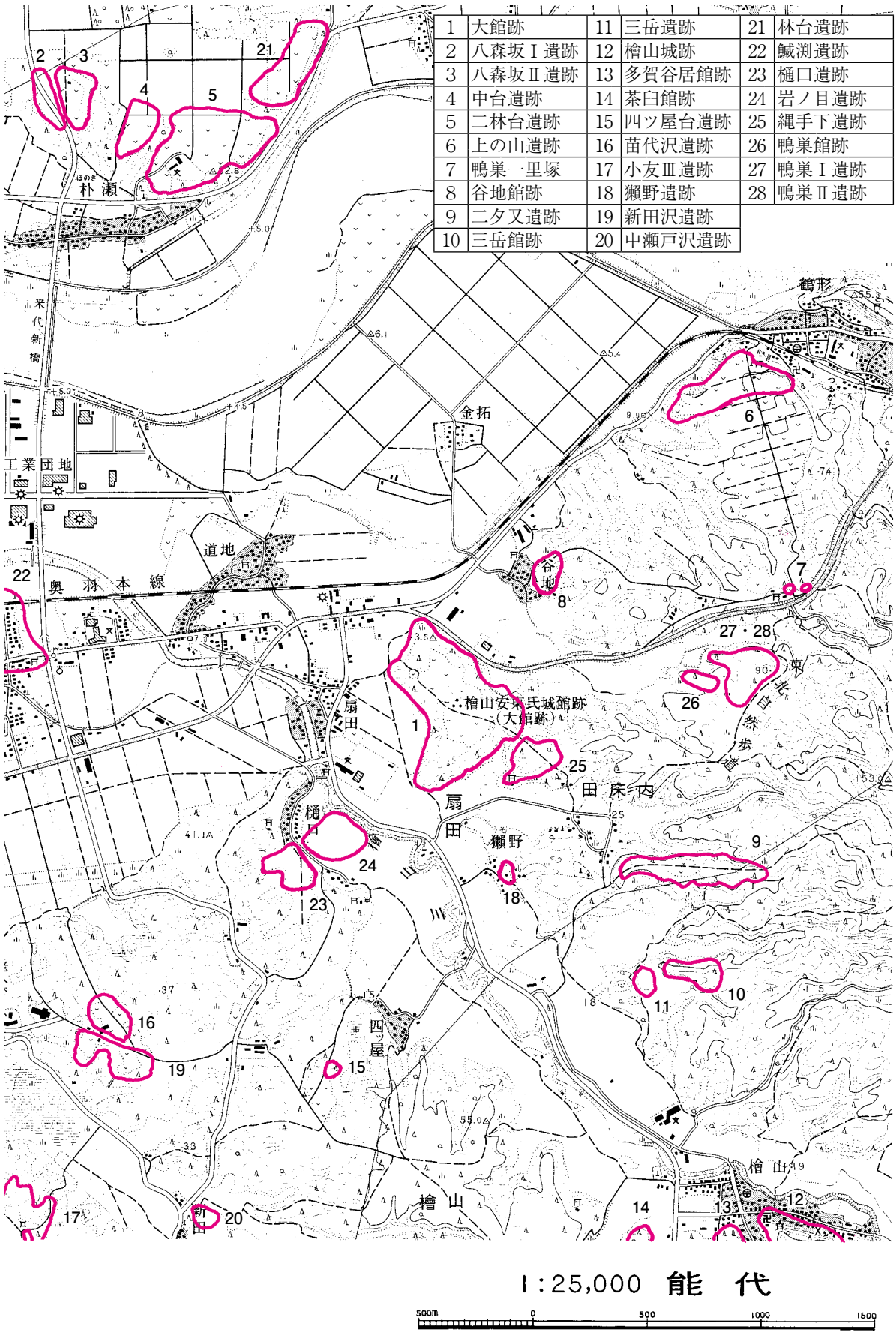
今回の調査対象地は平安時代集落が広がる台地上の平坦部のうち、台地中央を区画する土塁・空堀周辺と南東部の張り出しを区切る土塁・空堀周辺、及び柵列が巡る台地北側縁辺である。

調査目的としては、柵列・土塁・空堀等の年代決定に係る情報として、広域火山灰(十和田ａ及び白頭山火山灰)の検出に努めるとともに、これらと平安時代集落遺構との詳細な重複関係を把握することにより柵列・土塁・空堀の構築時期を決定することを目的とした。また近年県内で調査が進められた同様の大型囲郭施設を有する 10 世紀後半～11 世紀代の遺跡(横手市大鳥井山遺跡、秋田市虚空蔵大台滝遺跡など)の類似遺構等との比較検討も併せて実施することとした。

今回の調査では、大館跡が「野代営」であるか否かを解明することは直接の目的とはせず、柵列・土塁・空堀等の施設が帰属する時期を絞り、複合遺跡としての内容解明に至る今後の問題点を整理することを第一とした。また長らく発掘調査が実施されなかった当該史跡について、能代市教育委員会との協力体制のもと、様々な形で調査成果を地元へ還元することにも努めることとした。

調査は遺構分布確認のため、それぞれの対象区の範囲内に幅２ｍ程度のトレンチを設定して調査し、掘り下げにあたっては堆積状況の詳細及び微地形の把握に主眼を置きながら遺構及び整地面を確認し、必要に応じて一部を拡張した。

記録にあたっては、台地上の三角点と国土調査杭から国家座標及び水準を導き、トレンチの形状と位置を光波測量し、各トレンチ内においては基準点を任意に設定して手取り計測を実施した。また基準点は光波測量し、室内で手取り計測図面と合成した。



1	大館跡	11	三岳遺跡	21	林台遺跡
2	八森坂Ⅰ遺跡	12	檜山城跡	22	鰄渕遺跡
3	八森坂Ⅱ遺跡	13	多賀谷居館跡	23	樋口遺跡
4	中台遺跡	14	茶臼館跡	24	岩ノ目遺跡
5	二林台遺跡	15	四ツ屋台遺跡	25	縄手下遺跡
6	上の山遺跡	16	苗代沢遺跡	26	鴨巣館跡
7	鴨巣一里塚	17	小友Ⅲ遺跡	27	鴨巣Ⅰ遺跡
8	谷地館跡	18	獺野遺跡	28	鴨巣Ⅱ遺跡
9	二夕又遺跡	19	新田沢遺跡		
10	三岳館跡	20	中瀬戸沢遺跡		

第８図　大館跡周辺の主な古代遺跡

調査の経過

８月 23 日、能代市教育委員会の協力を得て器財を現地に運搬し、テントを設営した。調査用ヤードおよび台地中央部を横断する土塁・空堀周辺の刈り払いを開始。27 日、土塁・空堀南側に並行して第１・２トレンチを設定し精査開始。付近の三角点より水準測量を実施。31 日、Ⅱ層下部～Ⅲ層中にかけて焼礫塊が多数出土することを確認、鍛冶関連の遺物か。土塁（ＳＦ６）に直交する第３トレンチを設定し、精査開始。

９月７日、第２トレンチをⅤ層（地山）まで精査。遺構掘り込み面はⅢ層中となるものの、複数の文化面としてはとらえられず。第１トレンチで幅８ｍもの大型プランを確認。９日、第３トレンチの断面より、土塁の構築土がⅢ層の直上に盛土されることを確認。10 日、第１トレンチの大型プランが、第３トレンチ拡張部（３Ｂトレンチ）まで広がる竪穴建物跡（ＳＫＩ５）のプランである可能性。南西隅を検出するため第１Ｂトレンチを設定し精査開始。30 日、空堀（ＳＤ７）の掘り下げ精査を開始。

10 月１日、第１Ｃトレンチで南東隅を確認、残る北西隅が係る第３ＣトレンチのⅢ層精査中にフイゴ羽口が出土。６日、第３Ｃトレンチ精査により、大型の竪穴建物跡と重複して古い別の竪穴建物跡（ＳＫＩ５４）の存在を確認。また第３トレンチのサブトレンチで検出した鍛冶炉がこの古い竪穴に伴うものと確認。７日、空堀の堀底付近に礫群を検出。逆台形の断面形である。８日、古い竪穴の鍛冶炉周辺を精査。凝灰岩質の礫を煉瓦状に加工した塼の様な形態の石製品破片が散乱している。炉の基部に使用したものか。14 日、文化庁記念物課埋蔵文化財部門林調査官来跡。土塁構築時にⅢ層が削平を受けていないか確認すること及び竪穴建物の主柱穴を確認することについて指導を受ける。20 日、第１Ｃトレンチでの炭化材出土状況から、新しい竪穴は壁溝を持たず、壁より１ｍ弱内側に検出した溝が板壁の痕跡である可能性が想定された。23 日、現地見学会を開催し、新野直吉委員以下、77 名が参加。地元扇田・田床内地区や檜山地区を始め、県外からも多く参加があった。28 日、第１Ｃトレンチの炭化材下より新旧２時期の主柱穴を検出。板壁内側に沿って合計９本の主柱穴を有する構造を想定できる。以後埋め戻しに係る。

11 月５日、埋め戻しを終了し、能代市教育委員会の協力によりテント等器財を撤収。調査の全工程を終了した。

２　検出遺構と遺物

基本層序

調査区の基本層序については、遺構確認面を含む平安時代包含層及びその上面へのＳＦ６土塁構築土の盛土が累重する、第３トレンチの西側断面を基準とした。詳細は次のとおり。

第Ⅰ層　10YR2/3 黒褐色シルト層 植物根多量含む 表土

第Ⅱ層　10YR4/4 褐色シルト層 地山小粒少量含む 炭小粒少量含む 耕作に伴う整地層か よく締まる

第Ⅱ'層　10YR3/4 暗褐色シルト層 炭中粒少量含む 焼土中粒少量含む Ⅲ層由来の旧表土か 相対的に低い部分に堆積するが、高い部分ではⅢ層上面に幾分腐植を挟み痕跡的となる

第Ⅲ層　10YR3/3 暗褐色シルト層 炭中粒多量含む 焼土中粒多量含む 平安時代包含層

第Ⅳ層　10YR4/3 にぶい黄褐色シルト層 地山漸移層

第Ⅴ層　10YR5/6 黄褐色シルト層 地山

検出遺構と遺物

検出された遺構の総数は59基で、竪穴建物跡２棟・土塁１条・空堀１条・溝状遺構３条・土坑６基・柱穴様ピット46基となる。竪穴建物跡及び溝状遺構、土塁・空堀について本項で詳述する。また平面プランとしては確認できなかったが、第４トレンチ北・西壁、第３トレンチ北側のサブトレンチ東壁では地山漸移層(Ⅳ層)まで削られた部分があり、第４トレンチ北西部及び第３トレンチ北東部には竪穴状遺構の存在が想定される。特に第３トレンチ北東部のものはＳＫＩ54竪穴建物跡と重複して新しいと思われる。土塁・空堀は台地中央を東西に横断する大規模なものである。遺構は大型のものを中心に部分的に精査を実施したが、柱穴様ピット等、確認プランを記録するに留めたものもある。第９図に詳細を記す。

(１)竪穴建物跡

ＳＫＩ５竪穴建物跡

第１・３トレンチにまたがって位置する。立木により全容は不明であるが、第１Ｂ・１Ｃ・３Ｂ・３Ｃトレンチを設定し、プランの四方隅を確認した。南北10.4ｍ×東西8.2ｍの長方形プランで、最も深い部分では60cmを測る。床面は原地形が低い第１・１Ｃ・３トレンチでは大半が貼床されているが、若干高い第３Ｃトレンチでは地山となっている。また第３ＣトレンチではＳＫＩ54竪穴建物跡と重複して新しい。壁溝は無いが、壁から１ｍ弱内側に浅い溝が巡っており、第１Ｃトレンチ出土炭化材の確認状況により、この位置に板壁が巡っていたことが確認できた。またこの板壁の溝に沿って内側に深さ46～63cmの主柱穴と考えられる柱穴を６基確認した。主柱穴は重複するもの及び貼床上・下と分けられるため、略長方形を呈する板壁内側に沿って、四隅とそれぞれの中間、及び中央の合計９本で構成されることが想定される。

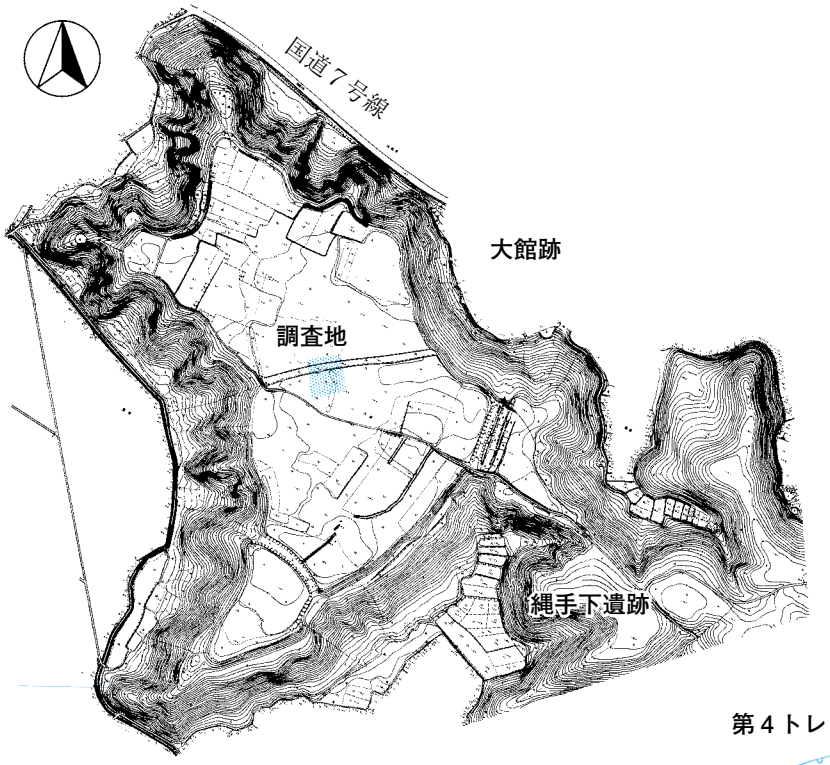
覆土は一括埋め戻しであるが、始めに周囲(特に東西北辺)から地山ブロック混じりの土を入れ、その後に黒色土で一気に埋め戻されている。平安時代包含層であるⅢ層の上面近くから掘り込まれており、覆土上半～Ⅲ層、そして上位のⅡ層にかけて焼礫が多量出土した。後述する鍛冶関連の遺物と思われる。

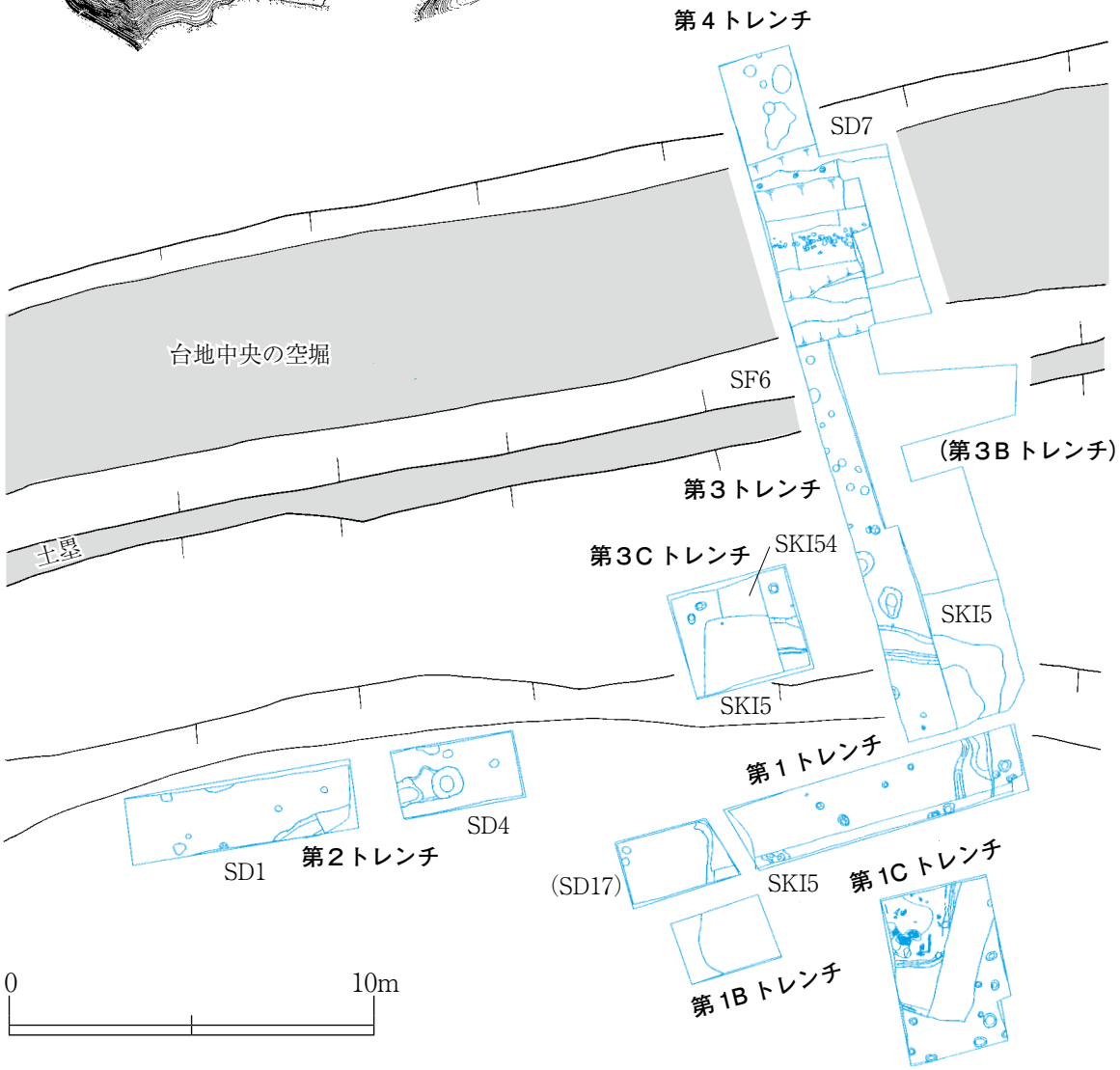
遺物は須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄製品・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石が出土した。

ＳＫＩ54竪穴建物跡

第３ＣトレンチでＳＫＩ５竪穴建物跡と重複する古いプランとして確認した。Ⅲ層の下半から掘り込まれ、東側に広がるプランとなるため、第３トレンチのサブトレンチ西壁までの広がりは確認できたが、東壁では判然とせず全容は不明である。サブトレンチ内で検出した鍛冶炉は、層序の比較検討によりこの竪穴建物跡の屋内施設と考えられる。炉部分はピット状に掘り下げて炭化物を充填し、床面は広く貼床されている。貼床上の作業面には、凝灰岩質の礫を加工・調製した石製品が散乱していた。科学分析結果からは、十和田火山の鳥越火砕流に伴う流出岩を米代川から採取して使用したことがうかがわれる。半分ほどの形状を残し、塼の形状を意識して加工されたものもある。床面に柱穴様ピットを検出し一部を精査したが浅く、主柱穴は不明である。

覆土は薄く、最深でも26cm程度しか確認できなかったが、重複してＳＫＩ５竪穴建物跡が構築されるため、土圧を受けていることも想定される。





第９図　調査区トレンチ詳細図

遺物は須恵器(甕)・土師器(坏・甕)・鉄滓・フイゴ羽口・焼礫・粘土塊・軽石が出土した。

(２)溝状遺構

ＳＤ１・４溝状遺構

第２トレンチに位置する。トレンチ中央東寄りが立木により調査不能であったため、別々の遺構として精査したが、連続する同一の溝状遺構と考えられる。部分的な精査しか行っていないが、底面に柱穴等は確認できず、溝状遺構とした。確認長が約 5.5 m、最大幅が約 0.9 mで若干弧状となる。Ⅲ層上面近くから掘り込まれるため、ＳＫＩ５竪穴建物跡と同時期以降の構築が想定される。深さは最深で約 60cm である。底面形状は凹凸が激しいが、概ね丸底状である。

遺物は石鏃、須恵器(壺)・土師器(坏・甕)・焼礫が出土した。

ＳＤ 17 溝状遺構

第１トレンチ西端、ＳＫＩ５竪穴建物跡の西側で検出したが、掘り込みが浅くＶ層上面(地山面)までほとんど到達しないためプランは不明であるが、南北の断面精査により同様の断面形状を確認できたため、溝状遺構とした。両断面から推定できる確認長が 1.8 m、最大幅が 0.7 m、深さは最深で 30cm である。Ⅳ層(漸移層)から掘り込まれるため、隣接するＳＫＩ５竪穴建物跡より古い時期の構築で、Ⅲ層下半から掘り込まれるＳＫＩ 54 竪穴建物跡よりも古い可能性もある。

プランの検出が遅れたため出土遺物のほとんどはⅢ～Ⅳ層出土として取り上げたが、原位置が確実な遺物としてフイゴ羽口が出土した。

(３)土塁

ＳＦ６土塁

第３トレンチ北端で検出した。台地中央を東西に横断している土塁で、並行するＳＤ７空堀の掘削土を用いて南側にのみ構築される。調査区内においては近世以降の開墾により削平され、南側にかけて数m整地されている。両遺構は現況でもよく確認でき、確認長は約 190 mである。調査は約 3.5 mの幅で上面を面的に精査を行い、また約１mの幅で断ち割り精査を行った。土塁の基底幅は５m、現存高さは 0.8 mである。構築土は大きく３層に分けられるが、平安時代包含層であるⅢ層を直接覆うため、ＳＫＩ５竪穴建物跡より新しい。土塁構築土は下位から順に暗褐色土→地山ブロック混じり褐色土→地山ブロックによる明黄褐色土となり、概ねⅢ層からＶ層までの掘削土をそのまま盛土して構築されている。土塁頂部に杭状の痕跡を２か所確認したが、時期は不明である。構築土の下～中位から擦文土器が出土している。

遺物は縄文土器・剥片、須恵器(甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・焼礫・フイゴ羽口が出土した。

(４)空堀

ＳＤ７空堀

第３・４トレンチの間に位置する。ＳＦ６土塁に並行し、台地中央を東西に横断している。この空堀の掘削土を用いて南側に盛土し、ＳＦ６土塁が構築されている。南側のＳＦ６土塁と比高差約 1.2 m、北側平坦地と比高差約 0.5 mという状態で、現況でも長大な凹地として確認できる。調査は約 2.8 mの幅で面的に精査を行い、第３～４トレンチと連続する断面精査を行ったところ、平安時代包含層のⅢ層上面から掘削して構築されていることが確認できた。Ⅲ層上面を基準として開口部は約 6.3 m、深さは約 1.9 m、底部幅は約 1.4 mで、現況では 1.4 m程度まで埋まっている状況である。断面形状は

逆台形の箱堀で、堀底中軸に沿った幅 50cm 程度の凹地に礫群が配されており、精査した範囲で 50 点を確認した。ほとんどは自然礫であるが被熱したものも多く、須恵器大甕破片２点及び砥石破片１点、敲石１点が含まれていた。砥石破片は第１トレンチ西側Ⅲ層(前述したＳＫＩ５竪穴建物跡上面)出土の砥石破片と接合した。また覆土下位から鉄滓も出土している。礫群下位の第 14 層は硬く締まっており、礫を敷いた堀底道と思われる。断面精査のため礫群から 10 点ほどを取り上げた。

遺物は縄文土器・敲石、須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・砥石・鉄滓・焼礫・粘土塊、須恵器系中世陶器(甕)、近世磁器が出土した。

遺構外出土遺物

遺構外からの出土遺物としては、第１(１Ｂ・１Ｃを含む、以下同じ)トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・黒色土器(坏)・内黒土師器(坏)・擦文土器・砥石・鉄製品・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石、近世磁器が、第２トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄滓・焼礫・粘土塊、須恵器系中世陶器(壺)、近世陶磁器が、第３トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・鉄滓・焼礫・粘土塊・軽石、(瀬戸美濃？)、近世陶磁器が、第４トレンチから須恵器(壺甕)・土師器(坏・甕)・擦文土器・焼礫・粘土塊・軽石、近世陶磁器が出土した。また須恵器(壺甕)が表面採集された。

須恵器は出土量が少なく、遺構内外から壺甕類のみ 37 点が出土した。土師器では柱状高台を呈する坏も含まれ、概ね 10 世紀代に収まると思われる。擦文土器は 10 世紀後半～11 世紀代のものと思われる。各トレンチから出土したほか、ＳＫＩ５竪穴建物跡及びＳＦ６土塁・ＳＤ７空堀からも出土している。須恵器系中世陶器と思われる破片が２点(壺・甕)出土したが、四耳壺の破片だとすれば新しくても 13 世紀前半代に収まると思われる。

３　摘要

大型のＳＫＩ５竪穴建物跡からは土師器と擦文土器が共伴した。このＳＫＩ５は鍛冶工房と考えられるＳＫＩ 54 竪穴建物跡に重複して新しく、出土遺物から同様に鍛冶工房と思われる。ＳＫＩ５は壁から１m弱内側には板壁が巡り、その内側に沿って９本の柱で上部構造を支える構造をとると思われ、壁立式の建物となる可能性も想定できる。トレンチ調査のため全容は不明であるが、建物内部が広く、板壁で内部が仕切られる構造をとった可能性も考えられるのではないだろうか。

本調査区において火山灰は確認できなかったため、この２棟の竪穴建物跡は火山灰降灰後の構築と考えられ、擦文土器を伴わないＳＫＩ 54 が降灰後の 10 世紀中頃まで、擦文土器を伴い重複して新しいＳＫＩ５がそれ以降の構築と想定される。

ＳＦ６土塁はⅢ層に直接盛土構築されているが、断面観察からも並行するＳＤ７空堀の掘削土を逐次用いて南側に盛土構築されたものと考えられる。また構築土の下～中位から擦文土器を出土することや、堀底道に敷かれた礫群中の砥石破片と、ＳＫＩ５確認面直上のⅢ層中出土砥石破片とが接合したことからも、ＳＫＩ５廃絶(埋め戻し)後、そう下らない時期に土塁・空堀が構築されたと思われる。

図版８

調査区現況（西→）
台地中央を東西に横断するＳＤ７空堀と南側に並行するＳＦ６土塁は、現況でも比高差が1.2ｍほどあり、容易に確認できる。北側には土塁は構築されず、0.5ｍ程度の比高差となる。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（西→）
第１トレンチで幅８ｍにもおよぶ長大なプランを確認した。サブトレンチを入れたところ一様な平坦面を呈し、竪穴の四隅を探すためのトレンチを新たに設定した。

ＳＫＩ５竪穴建物跡
確認状況（南→）
第３Ｂトレンチ（写真奥）で北東隅を確認した状況。サブトレンチを設定し精査した。壁より１ｍ弱内側に溝が巡る。

図版9

ＳＫＩ５竪穴建物跡炭化材検出状況（南→）
第１Ｃトレンチで南東隅を確認し一部を精査したところ、火災に遭った状況を確認。右側の大型材は内部を巡る溝に沿い、板壁を構成したものと思われる。

ＳＫＩ５・54 竪穴建物跡確認状況（南東→）
第３トレンチのサブトレンチにＳＫＩ 54 に伴うと思われる鍛冶炉を検出した。ＳＫＩ５はⅢ層上面近くで掘り込まれるが、ＳＫＩ 54 はⅢ層下位で掘り込まれている。

ＳＦ６土塁断面状況（北→）
土塁はⅢ層上面を覆うように盛土構築されているが、近世以降の削平を受けている。

図版10

ＳＤ７空堀精査状況（北東→）
現況でも確認できる空堀は約 1.4 m埋没していた。崩落も少なく、自然堆積で埋まっている。

ＳＤ７空堀礫群確認状況（東→）
断面が逆台形を呈する空堀の堀底付近には約 50cm 幅で礫群が検出された。堀底道と思われる。

ＳＤ７空堀完掘状況（北東→）
空堀の掘削土を逐次用いて土塁が盛土構築されたため、土塁上部は地山ブロックの盛土層となっている。しかし北側には盛土されていない。

第５章　調査成果の普及と関連活動

調査成果の普及のために、次のような関連する活動を行った。このことは主に調査班の五十嵐一治が担当した。

１　諸団体主催行事への協力活動

発掘調査の現場や、政庁跡、外柵南門・大路周辺地域などにおいて、下記諸団体などの遺跡視察・研修・見学会に対し、払田柵跡の説明等を行った。

北上市あいさり大学（６月 15 日）、盛岡市西部公民館「古代史講座『厨川柵』」（７月 10 日）、東京大学大学院日本史（佐藤信教授）研究室（７月 26 日）、秋田大学大学院教育学研究科・教育文化学部渡部研究室（７月 29 日）、文化財保存全国協議会（８月 20 日）、金沢学院大学人文科学研究科（８月 25 日）、美郷町立千畑中学校（９月８日）、平成 22 年度「よみがえる平安の柵」払田柵再現事業参加者（大仙市立高梨小学校・横堀小学校、11 月９日（雨天中止））

２　平成 22 年度払田柵跡環境整備審議会への出席

平成 23 年１月 28 日（於：大仙市役所仙北支所）

３　報告・発表

①五十嵐一治　「史跡払田柵跡－調査の歴史－」あいさり大学（高齢者講座）
平成 22 年５月 12 日　相去地区交流センター下組公民館

②五十嵐一治　「払田柵跡　平成 22 年度の調査概報」、「大館跡」
『第 37 回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』
平成 23 年２月 26･27 日　横手市かまくら館（横手市）

③五十嵐一治　「出羽国城柵の終末－秋田城・払田柵を中心に－」
第 37 回古代城柵官衙遺跡検討会
平成 23 年２月 26･27 日　横手市かまくら館（横手市）

４　資料の貸出

【貸出資料】払田柵跡出土資料（柵木）
・秋田県立博物館（『境界に生きた人々』第３回北東北三県共同展）
平成 22 年５月 28 日～平成 22 年７月 11 日（～10 月 24 日）

【貸出資料】払田柵跡出土資料（木簡ほか）
・東北歴史博物館（『多賀城・太宰府と古代の都』特別史跡多賀城跡調査 50 周年特別展）
平成 22 年９月４日～平成 22 年 10 月 24 日

【貸出資料】払田柵跡出土資料（写真ほか）
・山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
（『平安初頭の南出羽考古学　－官衙とその周辺－』平成 22 年度第 18 回企画展展示図録）
平成 22 年 10 月１日～平成 22 年 11 月 30 日

５　史跡払田柵跡の現状変更

当事務所では、史跡の管理団体である大仙市と協議・協力の上で遺構と歴史的景観の保護に努めている。しかしながら、やむなく史跡内の現状を変更する場合には、申請者及び関係機関と遺跡保護のための協議を重ね、遺跡への影響がない範囲で最小限の現状変更に伴う調査を大仙市と行っている。

平成 22 年度の現状変更申請は、第 141 次調査を除くと５件であった。これらの対応については、立ち会いを大仙市教育委員会文化財保護課が担当し、当事務所が協力する形で実施したものである。

番号	申請者	申請地	申請の理由	申請年月日	許可年月日	対応立会日	備 考
1	個人	大仙市払田字館前98-1	盛土	平成21年10月14日	平成21年12月11日	平成22年５月14日着手時及び施工中随時立会 完成22年８月12日完成確認	盛土 （土地改良）
2	大仙市	大仙市払田字館前100-1外	盛土	平成22年１月10日	平成22年３月19日	平成22年４月１日着手時及び施工中随時立会 平成22年４月20日完成確認	史跡保護・景観保全
3	大仙市	大仙市払田字百目木９外	盛土整地工事	平成22年３月29日	平成22年５月21日	平成22年10月29日着手時及び施工中随時立会 平成22年12月16日完成確認	史跡整備関連
4	大仙市	大仙市払田字館前109-2字仲谷地88-1	盛土整地工事	平成21年４月28日	平成21年７月17日	平成22年10月１日一部施工着手・着手時及び施工中随時立会(現在継続中)	史跡保護・景観保全
5	個人	大仙市払田字館前1外	水路改修	平成21年６月26日	平成21年９月25日	平成22年11月１日一部施工着手・着手時及び施工中立会(年次計画により現在継続中)	農地(排水路)整備

※対応・立会日は、平成 23 年１月末までの状況

払田柵跡調査事務所の沿革

年	月	事項
昭和 49.	4	「秋田県払田柵跡調査事務所」を仙北町公民館（高梨字田茂木）内に設置。 第１次５年計画調査を開始。
49.	8	調査・研究の適正な実施を図るため、顧問２名を委嘱して指導体制を確立。 顧問には秋田大学教授・新野直吉氏（～調査指導委員として現在に至る）と多賀城跡調査研究所長・岡田茂弘氏に委嘱。
50.	6	岡田茂弘氏の文化庁転出に伴い、多賀城跡調査研究所長の氏家和典氏に顧問を委嘱。 （～昭和 52 年度）
50.	10	第７次調査区（外柵南門跡北側）で「嘉祥二年」銘の木簡出土。
52.	5	第 12 次調査区で政庁正殿跡を検出。
54.	4	事務所を史跡内の払田字館前 100 番地にある独立した建物内に移設。 第２次５年計画調査を開始。
55.	3	第６回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。
56.	10	秋田県埋蔵文化財センター開設に伴い、事務所も同所内に移転、現在に至る。
57.	8	常陸宮殿下・同妃殿下　政庁跡を御視察される。
57.	11	ホイド清水（第 49 次調査区ＳＥ 550）から「絵馬」や第 16 号木簡など出土。
58.	6	国立歴史民俗博物館教授・岡田茂弘氏に再び顧問を委嘱する（～調査指導委員として現在に至る）。
59.	4	第３次５年計画調査を開始。
59.	5	第 55 次調査区で外郭南門跡を検出、４時期であることを確認。
60.	3	正報告書第１集『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』を公刊。
61.	4	事務所の名称が「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称される。
61.	5	第 65 次調査区で外郭南門跡に接続する石塁を検出、古代東北城柵遺跡では初見。
62.	5	第 68 次調査区で外郭東門跡を検出。
63.	6	史跡の追加指定がなされ、指定面積は 894,600㎡となる。
平成 1.	1	第 73 次調査で検出された外柵材木塀のうち３本の角材を年輪年代測定した結果、最外年輪測定年代が、西暦 801 年と特定された。このことから、外柵の成立年代すなわち払田柵の創建がこの頃であることが確実となった。
1.	4	第４次５年計画調査を開始。
1.	8	第 81 次調査区で外郭西門跡の柱掘形を検出、これで外柵・外郭の８門跡は全て確認。
6.	4	第５次５年計画調査を開始。
7.	2	第 21 回古代城柵官衙遺跡検討会を仙北町で開催。 特集テーマ『払田柵跡発掘 20 年の成果から－城柵研究の新たな視点を求めて－』。
7.	3	『払田柵を掘る－払田柵跡調査 20 周年記念誌－』刊行。
8.	9	第 107 次調査区（外郭北門跡東側）では、木道に転用されていた角材が上下端とも残存し、全長 4.6 mであったことから、外郭材木塀の高さ（約 3.6 m）が明確となる。
11.	3	正報告書第２集『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』を公刊。
11.	4	第６次５年計画調査を開始。長森丘陵部西側を主な調査対象区とする。
13.	9	第 119 次調査区（長森西端部）では緩斜面地を段状・平坦に整地させた面に鍛冶・鋳造関係の工房跡が複数存在することが判明。「出羽」と刻書された土器も出土。
14.	4	調査事務所に班制が敷かれ、調査班、総務班となる。
15.	10	第 122 次調査区（長森中央西側）で瓦質土器、第６号漆紙文書が出土。
16.	4	第７次５年計画調査を開始、真山地区を調査対象区に組み入れる。 本次計画において初めて「払田柵跡関連遺跡の現況調査」を明文化。
16.	9	第 125 次調査区（真山丘陵部）で古代の火葬墓を検出、古代墓は初出。
17.	4	調査研究等の事業を適正に実施するため、「史跡払田柵跡調査指導委員会」を設置し、４名の委員を委嘱。
19.	11	関連遺跡の試掘調査として、横手市雄物川町造山地区を試掘。８世紀代の集落遺跡を新発見。十足馬場南遺跡とする。
20.	7	関連遺跡の内容確認調査として、横手市町屋敷遺跡において“稲倉跡”とも推測される大型の総柱掘立柱建物跡を検出。時期は９世紀後半。
21.	3	正報告書第３集『払田柵跡Ⅲ－長森地区－』を公刊。
21.	4	第８次５年計画調査を開始。沖積地部を主な調査対象区とする。
21.	5	「秋田県重要遺跡調査事業」（県単独）の一環として第 139 次調査を実施。
21.	11	関連遺跡の調査で、造山遺跡から８世紀中頃～後半代の竪穴建物跡を検出。カマドの構造から坂東を出自とする集団による移民集落の建物跡か。
22.	8	「秋田県重要遺跡調査事業」（県単独）の一環として、檜山安東氏城館跡（大館跡）調査を実施。

払田柵跡調査事務所　要項

１　組織規定

秋田県教育委員会行政組織規則(抄)

第八条　　生涯学習課の分掌事務は、次のとおりとする。

十五　　払田柵跡調査事務所に関すること。

２　　生涯学習課文化財保護室は、前項第六号に掲げる事務のうち文化財の保護に関すること及び同項第十号から第十六号までに掲げる事務を分掌する。

第十三条　　払田柵跡調査事務所の名称及び位置は、次のとおりとする。

名　称	位　置
秋田県教育庁払田柵跡調査事務所	大仙市

２　払田柵跡調査事務所の分掌事務は、次のとおりとする。

一　史跡払田柵跡の発掘及びこれに伴う出土品の調査研究に関すること。

二　史跡払田柵跡の環境整備に関すること。

２　職　員

(平成 23 年３月現在)

職	氏　名	備　考
所 長	櫻田　　隆	本務　秋田県埋蔵文化財センター所長
副主幹兼総務班長	遠藤昭二郎	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班長
主 査	久米　　保	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
主 任	高村知恵子	本務　秋田県埋蔵文化財センター総務班
学芸主事兼調査班長	五十嵐一治	兼務　秋田県埋蔵文化財センター調査班
文化財主任	加藤　　竜	本務　秋田県埋蔵文化財センター調査班

３　調査指導委員

国指定史跡払田柵跡の調査研究等の事業を適正に実施するため、史跡払田柵跡調査指導委員会を設置し、４名の委員を委嘱した。

(『史跡払田柵跡調査指導委員会設置要綱』平成 17 年４月１日実施)

史跡払田柵跡調査指導委員名簿

	氏　名	現　職　等	専門分野
委　員　長	新野　直吉	秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長	古代史
副 委 員 長	岡田　茂弘	国立歴史民俗博物館名誉教授	考古学
委　　員	黒崎　　直	富山大学人文学部教授	考古学
委　　員	熊田　亮介	秋田大学学長特別補佐	古代史

報 告 書 抄 録

ふりがな	ほったのさくあと　だい　じちょうさ
書名	払田柵跡－第141次調査－
副書名	払田柵跡調査事務所年報2010
巻次	
シリーズ名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第466集
編著者名	五十嵐一治
編集機関	秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
所在地	〒014‐0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
発行機関	秋田県教育委員会
所在地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目1番1号
発行年月日	2011年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったのさくあと 払田柵跡	あきたけん だいせんしほった 秋田県大仙市払田 みさとちょうほんどうしろまわり 美郷町本堂城回	212 434	53-1 54-1	39° 28′ 06″	140° 32′ 57″	第141次 20100531 ～ 20100729	188㎡	学術調査
	第141次：大仙市 払田字仲谷地			北緯・東経は世界測地系による政庁部での数値				

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第141次	城柵	平安時代	河川跡	須恵器、土師器、木製品、銭貨	沖積地部における調査 外郭大路地区西側

要約	払田柵跡第141次は、第８次計画調査の２年次であり、長森丘陵南側の沖積地部を対象とした。調査の結果、調査区東側では北辺、調査区西側では北半に、火山灰が面的に分布することを確認した。南東側にかけては復元整備されている河川跡の氾濫原として浸食を受けており、南西部では島状微高地を確認した。また調査区に北西側は広く湿地帯を形成していることも確認できた。 今回の調査区から北東側に向け火山灰が面的に分布する長森丘陵裾部の微高地が広がると考えられる。

秋田県文化財調査報告書第 466 集
払田柵跡調査事務所年報 2010

払　田　柵　跡

－第 141 次調査概要－

印刷・発行　平成 23 年３月
編　　集　秋田県教育庁払田柵跡調査事務所
〒 014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋 20 番地
電話（0187）69-2442　FAX（0187）69-3330
発　　行　秋田県教育委員会
〒 010-8580 秋田市山王三丁目１番１号
電話　（018）860-5193
印　　刷　株式会社　松本印刷